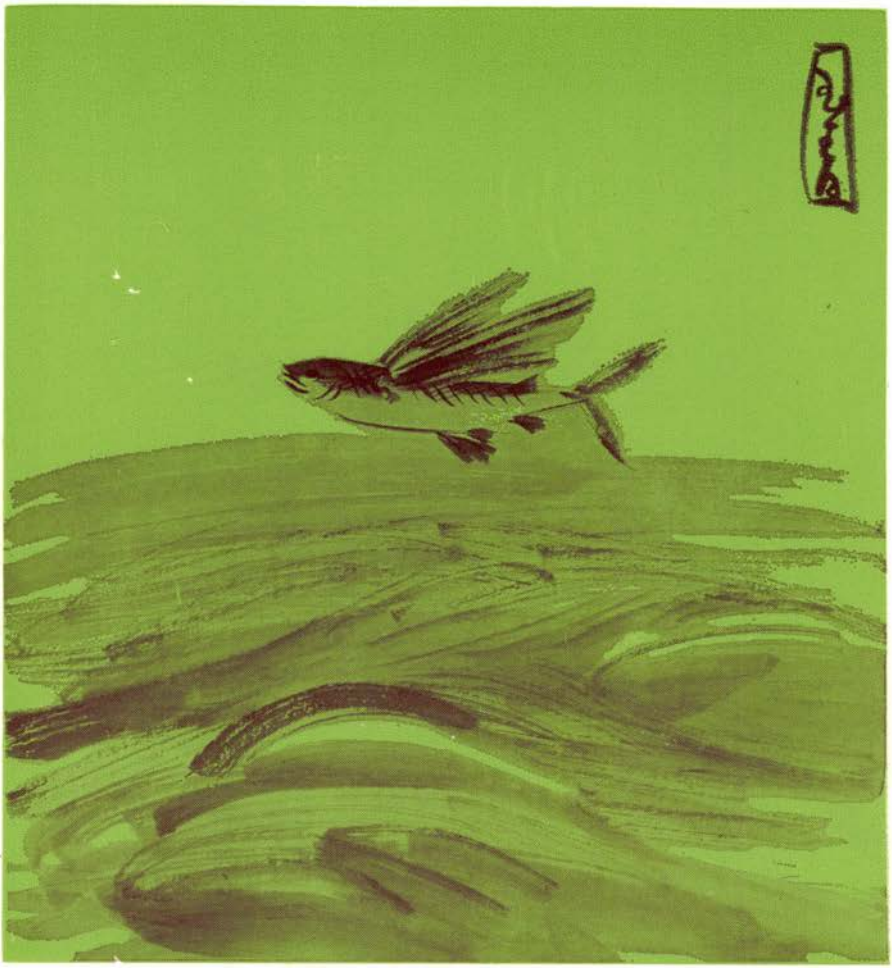
川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年四月二十五日 印刷
昭和五十一年五月一日 発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通巻 五八八号



日川協加盟

No. 588

句画集「生々楽天」特集

五 月 号

「旅人」以後の

麻生路郎作品（35）

（傍島　静馬）

三十七年十二月号

（不朽洞句帖）

錆びついた釘のようでも生きんとす
彼　何か云いたく　葬式はいらないと
高架下に　女　瀾れるだけただれ
ホステスの殺されるとも知らぬ恋
盤上の歩の如く彼即死する
この夕刊も即死の記事か　冬
やむを得ず校長してる顔で会い
見え透いた彼の打算に乗ってやる

南海電鉄川柳会「カーブ」

カーブまで来ると涙が落ちました

北川春巣氏の病気と川柳、引用句中より

斗病にラジオも持って行くという

三十八年二月号

（不朽洞句帖）

冬山へ頭突きをもってゆく阿呆
よろこんで死んだ冬山霽れわたり
ちちの涙ははの涙冬山は聳ゆ
捜索隊いらぬおせっかいにも思え
冬山で死にたい奴は死なせるさ
山で死ぬその無暴さが羨し
白骨白骨松風の音のみがする

南海電鉄川柳会「欠航」

欠航で淡路の姿もう見えず

三十八年三月号

（不朽洞句帖）

阿呆になろうと　ベレー冠ったグランドパ
何も彼も捨ててから　太陽とともに
女は好きですと　正直に云える齢
選挙などバカらし　貝にとじこもる
軽蔑をしたりされたり　老いにけり
城下町今も弓ひく人が住み
竹馬に乗った憶い出城下町
あいの子を悲劇と見るも城下町
城下町酒うる家をなつかしむ
城下町ここから博士二三人

名句と難句の中に

いつのまにか駅長禿げているのなり

南海電鉄川柳会「試運転」

試運転あの山この島迎えられ

北川春巣氏病気と川柳、引用句中より

たまたまのたより脳溢血と聞く

染めなおし似ようて喜寿の衣替え

得心をしたとはのっぴきならぬ顔

五十肩いたわり合うてピエロめき

喜寿せめて生き恥曝さぬだけ禱り

毒舌が手締代りに座をわかせ

中島生々庵

名付け

私共夫妻の金婚に際して、句画集「生々楽天」が、皆様の限りない祝福の裡に出来上がった。心から感謝申上げている。皆様にご心配のかけっぱなしであったが、私も私なりに「生々楽天」の書名を決定する迄には相当に心を配った。由来書名であろうと、画題であろうと、当事者は慎重にならざるを得ないのは当然で、殊に人間の新生児の名前にいたっては猶更らである。子にとっては生涯つきまとうのであるから、親の気まぐれや、選挙用等めあてに決定されては、たまったものではない。鹿児島で生れた五つ児君についても世間は強い関心を持っていたが、2月6日の発表で、両親の懇請により、清水寺の大西良慶貫主が観音経の経典から選んで命名されたと知り、わが事のように安心したり、喜んだり。現在福太郎、寿子、洋平、妙子、智子の五児揃うて順調であるのは、勿論医療団の努力によることながら、両親としては観音菩薩の加護も深く感謝している事だろう。五君のご多幸を祷る。

座右の句
蝶がいて石に老若男女あり　（薫風）
私の句
ねぎ坊主どこかで星の子が生まれ　山本素郎

川柳塔　五月号　目次

題字・中島生々庵・表紙・直原玉青

名付け……中島生々庵…（1）
ヌード川柳……菊沢小松園…（2）
誹風柳多留廿五篇研究……（十）……清鈴木博美・八木敬一・紀内恒久・青木迷朗・西原亮黄・室山三柳・入江勇・岡田甫
川柳塔（同人作品）……若本多久志選…（4）
水煙抄……川村好郎選…（32）
麻生路郎物語……（17）……東野大八…（21）
秀句鑑賞……（同人吟）……菊沢小松園…（46）
……（水煙抄）……谷垣史好…（47）
近作……諸家…（39）
百人一首と川柳…（23）……冨士野鞍馬…（40）
愛染帖……正本水客選…（42）
「旅人」以後の麻生路郎作品…（35）……傍島静馬…（表2）
51年度二賞候補作品中間発表……（44）

ヌード川柳

菊沢小松園

今年ももう早いもので梅が咲き桜が咲き、やがてこの稿が皆さんの眼に触れる頃には藤か菖蒲の季節になっていよう、花が美しく咲き誇るのも目的は種族保存の切ない止むに止まれぬ自然の法則に依ったものであるが、そんな風に割切って考えて終えば無味乾燥なものになって、花を逐う純情さも失われる。眼で見た現象その儘を美しければ美しいと感じる処に本当の幸せも楽しさもある筈でその時その折の喜びに浸って居ればよいので裏の裏まで考えてから喜びを感ずる程の余裕や虚構は普通の場合必要ではない。然し乍らそれも時により場合によって裏の裏まで見透せる冷厳さを要求されることも無くもないのが此の頃の世相とあれば一概に手離しで純情さを表面にしての喜びに浸って居られないのも嘘や欺瞞で固められた現実かも知れない。川柳も近頃真面目の部分が多くなって面白さが欠け本来のユーモアの持つ良さが薄れて行くのも時代の持つ矛盾さや次から次と起きる世相

金婚・喜寿・古稀・生々楽天……中島生々庵……(26)
……橘高薫風・有信新之助……(27)
川柳の実用化……光武弦太朗……(48)
現代川柳軽視か無視か……吉田水車……(48)
時事吟……福浦勝晴……(55)
雅号ぶっちゃけばなし……久家代仕男……(63)
一分間の柳論……大矢十郎……(65)
初歩教室……松下梁水……(64)
大萬川柳「枝」……本田恵二朗……(52)
柳界展望……川村好郎選……(54)
本社四月句会……(庸佑・整理)……(58)
各地柳壇(佳句地10選)……川竹松風選……(62)
「善意」……小砂白汀選……(50)
一路集「鯉のぼり」……羽原静歩選……(50)
「母」……不二田一三夫選……(51)
編集後記……(一三夫・葉子)……(67)

座右の句

つばめああコンクリートばかりなり　(都之介)

私の句

イヤリング男へつんと見せるもの　舟木与根一

の段落の劇しさに反って圧倒されてユーモアの持つ自然発生的な奥のある床しい笑いなど迎も梃に合わない程世の中が阿呆らしいえげつないものに成り下った結果かも知れない。花を見てその花の美しさの以前の問題である施肥のことにまで思う人間には決して川柳人はなりたくないと近頃泌々おもう。従来一部忿懣の捨て場所として私なりに飯らぬ昔を想って句も女シリーズものを心掛けて僅かに自慰のつもりにして居たがもう迎もこんな事で追つ附けないほど劇しいものとなって来た日本の現状である。ロッキード事件からエキサイトしてヌード俳優前野光保が児玉邸へ飛行機で殴込みを掛ける心理からは到底生優しい手段で収まる世の中ではなさそうである。

待遇改善とやらに日本中の国鉄が二十四時間も主要幹線を止めても余り不思議がらない事も時代の現実でもう来る処まで来て終ったこの有様何を何うしろと言っても国是の中心が揺れ動いて国民が政治を信頼せなくなればどうなるのであろうか。川柳の問題では無さそうに思うが切めて私なりに女シリーズからもつと逃避して老境に桃源を求めて一切の煩しさの圏外でヌード川柳と銘打って老来を防ぐ切なる願望としたいと思っている。　呵々

すれすれのところで唇外される
女もう最後のもので勝負する

川柳塔

若本多久志選

島根県　堀江芳子

電話口むこうもお辞儀してるよう
心経をあげて気のすむまで座る
懸命に生きよう射し込む陽を信じ
散歩径　春吹きあげる緑かな
いつしかに怒り解けてる血のぬくみ
おむつ縫う春うらうらと胎動す

青森市　工藤甲吉

トライスター賄賂の音で離陸する
負け惜しみ金をきたないものとする
ストというわけにもゆかず種を蒔く
けし粒のような虫にも雄と雌
生は死をもって完了デスマスク
天と地と人　嘘つきは人ばかり

島根県　錦織文子

木枯しに耐える枯木同士の対話
乳児はすばらしい演奏家
惰性から逃がれたい白い足袋
雑草よ今年もお前と挑戦か
感激の余韻日記を埋めつくす
巣立つ子へ父の母の巣がゆれる

大阪市　天正千梢

愚痴を片手に貧しくするばかり
いいわけをやめて活きた石を打つ
雛段飾り我が家の春はこぼれそう
太陽にくすぐられ二ツ葉おどり出し
インスタント文化へ民話の油さしてくれ

松原市　谷垣史好

靴音の高い女を許せない
蛍螢や寝起きの悪い虫もいる
ワニ園の鰐動かない真昼
天高くあの日特攻出撃す
ギャンブルがない水曜の空の色

桜井市　岩本雀踊子

涙線の弱い男ののど仏
少年に日本一の母が居る

陰できく他人の言葉がつきささり
人並に生きたい朝の歯をみがく
七十五日の噂に耐えているこぶし

神戸市　小浜牧人

父はかく生きしか白梅寒に耐え
銘々皿に母のこころが分けてある
耳聡く女ひとりの夜を守り
無縁墓訪うは過ぎゆく風ばかり
春一番小さい愛の芽が育ち

竹原市　森井菁居

公害を呪うて春の花が病む
正論にうろたえがない旗かざす
ジレンマにおさらばしたい髭をそる
教育パパめいて日曜日が多忙
光陰をほのぼのランドセルを買う

大阪市　不二田一三夫

「川柳寄席」校了　やっと墓が出来
整形をしたまま女　老けてゆく
エプロンは白　平等化したつもり
早口で喋べる女のよく食べる
この人も二たことめには金のこと

島根県　小砂白汀

敵を知りおのれを知ってけつまずき
春死なん未完の詩を書きながら
りゆうりようと生きるラッパが今朝も鳴る

折れ芯で書けば見事に字がダブリ
晩年を見せぬ自負心背を伸ばす

新宮市　大矢十郎

カタカナの料理も慣れて喜寿と古稀
長髪へ載らぬ角帽買うも父
心まで変る女の身づくろい
吸がらへ紅つくところ見ていたり
婦人科の廊下なまめくネグリジェ

藤井寺市　西いわを

十一面観世の胸は亡母の胸
排ガスの匂い打ち消せ沈丁花
おなじ部屋同じ空気を吸うた仲
剃り跡がくつきりのこる地蔵眉
執念を通しおんなの業と言う

三重県　川上大輪

聞き流す耳だがちゃんと二つある
十文三分一家を支える足の裏
逃げられぬ指輪が薬指にある
耳たぶの厚さ愛語を溜めている
やすらかな寝顔は神に還ってる

大阪市　本多柳志

四捨五入して自画像の書きにくし
左還から住めば都の花便り
車庫入りの電車のように来た訃報
ネクタイへ見せる若さをためらわず

急行通過助役は花の下に立ち

和歌山市　野村太茂津

夕凪ぎへためらいもなく廻り道
満ち足りた一日夕凪に抱かれて
昂ぶりを静め夕凪に吸いこまれ
夕凪ぎへ明日への愛もためらわず
あさましい心を夕凪ぎに浄められ

神戸市　仲　どんたく

還暦が枯れ山水の味を添え
でつかいでつかいオンザロック氷河行く
じじばばが孫のぬくみを奪い合い
あぶれた日　馬一と脚にかける糧
遺作展舞妓は年をとらぬまま

泉佐野市　阿萬萬的

日展を見て

のぼり窯素焼の影は春のもの
風化した石仏　雫に眼が光る
湖北残雪冬芽の赤がもう目立ち
楽屋では文楽人形首を垂れ
春の灯に能面微笑の影作る

大阪市　河野君子

過去のこと許して眠る春の海
春を病む少女は胸に絵を溜める
曇天へ塵も迷いを見せて舞う
報酬の笑顔一つが作れない

揺れ動く女心は火と水と

大阪市　金井文秋

完璧でない素人のよいところ
今の世に当てがい扶持と言うお布施
シクラメン花のポーズがみな違い
黙々と勤め生活に賭がない
長所短所合わせて神に授けられ

米子市　林　瑞枝

肩叩くその手は苦労を見て育ち
下積みに生きてニュースの裏が読め
それぞれの価値たんぽぽは畦に咲く
わが庭に欲しい石ねとハイキング
冗談咎む慈愛へ涙ぐむ

神戸市　中村ゆきを

ひそやかに十字架背負う子と暮し
泥まみれ女いよいよ強く生き
新聞少年のリンゴの頬が忘られず
真実はひとつ新聞を膝に置く
感情にゆれる女の頬を打つ

八尾市　大路美幸

瞽女悲し雪の深さを音で知る
本気かと本気で女に迫られる
六法に触れぬ程度の恋である
風呂敷を善人小さく折りたたむ
二十世紀のミイラ札束離さない

泣けるだけ泣いて心の朱を散らす
春や憂し風の匂いに人恋し
喪が明けて爪の先きから春がくる
花冷えや夫の苦言身にしみる
口紅の色　変えて小さな炎を抱きぬ

八尾市　高橋夕花

男がいるから発達した下着文化
大きな音をたてて時が流れだし
成し遂げたあとの姿が美しい
性教育無理をするからむつかしい
無情な声に聞える疲れた日

松江市　柳楽鶴丸

春気配素足が白い少年よ
土割つて春はまだかとつくしの子
三寒四温上着捨てたり拾うたり
何悲しゆうて忍び泣くかや春の雨
春愁は明治の娘を疲れさせ

大阪市　西出一栄

花屋から春の顔して出る男
パンタロン脱ぎ春の音抱き寄せる
恋をせぬ猫でやきもちなど知らず
負けてきて夕日へ背中向け直す
欲みんな捨てると凡夫生きかえり

貝塚市　野坂つき子

卒業した娘に女が匂いだす
憚らず流す涙に嘘がない
日記代りに自分宛にも出す旅信
中とってチップ折れ合う夫婦連れ
練っても練っても祝吟お世辞めく

宝塚市　傍島静馬

鳥取県　林露杖

蹄のとう断酒の舌にほろ苦がく
診察の順待つ椅子の冷たくて
一瞬の躊躇自動扉あく
埋れ火を今宵もそっと掘ってみる
抱擁を骨の鳴るほど軋むほど

岡山県　嘉数千代香

真実をこころに秘めている温味
寝返りを打てば倖せ消えそうで
曲り角の蟹に重たい鋏です
馬鹿になることのきびしさに疲れ
泣くまいと決めた日　白い花を購う

大阪市　中川滋雀

電話口泣き声だけの孫を知る
業拭う札所の雨を清く受け
飛鳥路の春ミーハーの花も咲き
もうわき見　出来ぬ残りの灯をかざし
また明日があるから許す言葉尻

富田林市　和田維久子

ハワイの思い出

若鷲を胸に常夏の海の碧
くたびれたアップの顔の機内食
旅帰りお茶漬けが待つ孫の待つ
その愛に答えてバラの素直なり
ノーという勇気が厚い壁やぶる

倉敷市　野田素身郎

春雨の情緒に青い目も蛇の目
電光ニュース見飽きた頃に女来る
颯爽とピリも卒業式に出る
父ちゃん頑張りやと老眼鏡を拭いてくれ
朧月思いは同じ二人なり

西宮市　島居百酒

訛から話がはずむ移民県
教会の挙式も暦を繰つて決め
自惚れの作へ批評の目は確か
避けられぬ死があり欲へ手綱ひく
ご機嫌をハミングにして独り風呂

島根県　堀江正朗

朝の音今日の倖せだけ想い
みんないて僕だけ気になる音ひとつ
足袋脱いで春を迎えに炬燵を出
春の陽はいいな貧しさ忘れさせ
あるときは優しいだけの妻でなく

岡山県　直原七面山

旅は良し瀬戸は静かに夕暮れて
尺取り虫に世渡りの術教えられ
夕映えを褒めて結婚には触れず
川の字に寝て川の字の鼾立て
勢いのおもむくところ妻家出

東大阪市　竹中肖二

結論を出せば味方が一人減り
車座になれば話が煮えつまる
山小屋の主役ストーブ赤く燃え
ひとり居の女の城が底冷える
日溜りに寄つて焼香順を待つ

守口市　羽原静歩

新聞の小さき善意へ眼をつむる
生きのびて幾山河の雲を追う

鯉のぼり

末法の風を孕んで鯉のぼり
鯉のぼり母のない子も揚げている
うららかに春陽をうけて辞書を繰る

柏原市　大峠可動

支え合う夫婦になって吹き溜まり
風に触れたくて仮面をとりかえる
倖せへの直線だ走れ夫婦
信じ合う美しさが今日を満たす
雲はさっさと過ぎて青春を呼ぶ

富田林市　板尾岳人

泣く訳けを山の峰なら聞いてくれ

もう泣くな峰吹く風に笑われる
泣きたけりゃ金剛山へ来てお泣き
泣きやむと金剛山に雪がない
金剛山花嫁衣裳を知っている

大阪市　大坂形水

院政の睨みを利かす前社長
そう言えば腰低くなった商社マン
贅沢をしても老残しれたもの
明いうちに帰ると家内不審がる
筍の出る頃になると胃が痛む

八尾市　高杉鬼遊

生々流転蓮の上なる露ひとつ
切り札を持たぬ男の肩まるし
落ち椿夜更けの部屋の耳となる
妻の風邪せめてみかんの缶を切る

大阪市　吉田圭井堂

細くとも流れておれば川であり
一億が住めて不思議な過疎地あり
考えて考えて皆けもの道
蒸発が猫でよかったとも言えず

東広島市　高橋鬼焼

笹舟に春を乗せよう水ぬるむ
妻少し酔うて反旗をおろさない
掌のぬくみ女と男のドラマだよ
三月の木馬に汗がにじんでる

竹原市　小島蘭幸

危なっかしそうに頂上にいる男
瞼閉じるとみな善人の顔になる
カップヌードルひとりで食べるものなるか
春だそれっ　かけ声ばかりいい私

松江市　小林孤呂二

春宵一刻あたい千金の酔いを知り
児から見る父の道草いつも酒
半分は嫌味などきく煙草なり
「下り坂」嫌な言葉をきくお昼

松江市　中川晃男

還暦の四肢健やかに官を退く
職に就く職を離れる春さむし
うとうととして受付の春うらら
呼出しの順待つ壁のしみ見つつ

八尾市　香川酔々

一本の傘でかばっている夫婦
天命に従い回る風車
過去帳の文字は確かに生きている
先憂後楽梅の心を知っている

大阪市　江城修史

夢賭けた息子が蕾つけた春
子に賭ける執念脳裡を亡父の顔
小糠雨吾が心にも渇くもの
金策に追われ夕陽が重くなる

竹原市　三宅不朽

夢を追い夢に追われている青春
旅ひとり私の影が邪魔になり
野仏の幻想絆の子が唄い
春のかぜ煙りもソロでおどりだし

京都市　松川杜的

欲しいもの何でも買える不仕合せ

月ケ瀬観梅

時雨またよし紅梅のひとり言
ダムの碧　白梅紅梅添えて撮る

随心院にて

化粧井戸文塚成程小町お寺

八尾市　宮西弥生

おはようの言葉でしこり洗われる
おたふくの面をもっていばら道
焦点をしぼれば男地に還える
贈られて淋しき曲のオルゴール

大田市　藤田軒太楼

茶飲み友もらえと友情気をつかい
年金で波風立てずに日々是好
告白を促すように流れ星
造反の夜の帳りに色がない

岸和田市　福浦勝晴

初孫の名つけに祖父として威厳
おでん屋の肴にされたロッキード
二、三べん訊いて念押す速達料
満員車で当然そうにガムを噛み

岡山県　白岩文衛

一椀のカタクリ五尺の身を托し
病院の薬の他にアロエ飲む
診察を待つ間に灸をすすめられ
窓しばらく明けてと病人雲を見る

大阪市　宮尾あいき

沈丁花老の埋れ火かき立てる
公認の老人になる誕生日
老眼へ鏡の顔が嘘をつく
古小袖女の業かしみの跡

大阪市　柳原静香

雲追えば故郷の空にゆきあたり
無為の日が続いて老いの日の短か
市場籠夢が小さくなりました
春風へ心の鍵を開け放ち

美祢市　安平次弘道

ジンクスに心の弱さみすかされ
熱つすぎるうどんへ発車ベルが鳴る
雑草も春ひかえめに花をつけ
正直を笑い子供の瞳にあわて

大阪市　黒田真砂

想い出はいつもばら色日記繰る
出る杭になるなと今も亡母の声

オルゴール心の声と和して鳴り
想い出に生きる女のお城です

島根県　藤井明朗

旅のよろめき雄鶏の羽ばたき
信念をくずす世相の波にゆれ
春を舞う蝶になりたい風ゆれる
退職のまだこれからの設計図

大阪市　藤田頂留子

たい焼きの人気にたこ焼き嫉いている
天眼鏡握って老いてく人相見
明日の道わからないから夢をもつ
知りすぎてからの対人ぎごちない

島根県　榊原秀子

ものうげな蠅一匹の日向ぼこ
黄水仙二月へ春の色で咲く
鶯の初音平和な早春である
繰返すまい焦げつきの鍋磨く

西宮市　若林草右

孫幼稚園卒業

赤ヘルになるなよ桃太郎犬猿も
将棋の歩のように保母さん児を並べ
孫の出る番組へ赤い丸をつけ
芽を切った球根の名は忘れとり

大阪市　山川阿茶

生々庵御夫婦へ

連れ舞の袂ゆたかに喜寿と古稀
寿とかいて筆おくいい気持ち
石垣のくずれたような脳となり

赤十字へつとめて

満三年傘寿の春をつつがなく

竹原市　山内静水

ポケットの硬貨早春譜を奏で
ふる里は野つぼが匂う春の風
夢一つ一つ家計簿ぴたり合い
一笑にふしてはならぬ妻の夢

松原市　玉置重人

一切を水に流したにがい酒
まっさらの家計簿今日から夫婦です
汐の香が弥陀に抱かれる耕三寺
ゼニ取って孝養門の色が褪せ

平田市　久家代仕男

ささやかな抵抗おんな貝となる
証人の口は木枯し紋次郎
檀頭が挨拶に立つ珠数をもち
汚濁した春の小川に歌がない

大阪市　西川誓二

洗濯機に馬力かけてる五月晴
生殺の権握る銀行を伏し拝み
双方の力量を利用してるヤジロベ
甍瓦にも歴史がしみる不退寺

泉大津市　村上春巳

白い杖犬は目覚とくよけて行く
街頭のテレビへオヨヨも背伸びする
たい焼もこらあたりは売れのこり
お水取りリスも知ってる顔を出し

島根県　松本昌

馬鹿になる智恵をようやく妻四十
背中から見れば女は隙があり
政治の貧困ヒットラーが出ない
源泉よお前はどこに行ったのか

倉吉市　奥谷弘朗

当選を片目で待っているダルマ
一輪の梅に弱気を励まされ
満ち足りた女房の顔が丸く見え
長生きをしてネと甘える子もおらず

枚方市　宮川珠笑

夕焼けへ飛行機点となり動く
妻泣かす話一晩抱く酒よ
昨年の乞食健在なり彼岸
休日出勤をいたわるがら空き電車

愛媛県　渡辺暁童

出棺へ心ききたる伯父一人
尼も和尚も　金仏が好き
偽証でかばう　妻のやりくり
安全第一　晩酌の量

倉敷市　水粉千翁

満ち足りてさしのべる手のためらわず
満ち足りて今日しめくくる靴を脱ぎ
満ち足りて箸の重さをたしかめる
満ち足りて明日の足音聞いている

兵庫県　遠山可住

蔵の扉が朝から開いている法事
のろのろ運転仔犬がよけてくれぬなり
総務課に戻りなだめるツボを持ち
まだ雪が来ると百姓あわてない

松山市　谷のぶお

茹卵の殻剝き童心とりもどし
梅凛と咲いて心をしめなおす
枯れすすき同じさだめの芽を育て
起重機も眠たくなった春霞

大阪市　川口弘生

哀しみの酒は涙で薄められ
貧乏に育ち倖せの数多い
神様の他所見　善人が殺される
寝られぬ夜また一言が多かった

鳥取市　両川洋々

芽吹くもの見付けた声で子が帰り
麻痺の子の夢　はつらつと天を駆け
風妬いて吹くほどアベック抱きつかせ
風紋のひととき亡友に似て淋し

岡山県　竹内翁童

愛相よく取れば間違いだと電話
病状が好転わがまま顔を出し
領収書頼むと客は酔っていず
みな長をつけてセールス出動し

生駒市　草深酔升

ピーポーが遠く遠のいたからねむる
ここに千年欠伸もせずに石仏
思索する境地へいきなり猫の恋
ほとばしる春の息吹を告げる梅

今治市　原田一風

白光の生命いとおし露の朝
流産をした出戻りにある手職
一円に居坐られてる古財布
自転車の荷台で任せ切った顔

和歌山市　内芝としよ

咲き誇る桜に哀しなたね梅雨
つつましい小部屋に光る表彰状
ナツメロに連想その人遠い人
握る手に愛の尺度を確かめる

富田林市　岩田美代

渡り鳥ある日の雲に抱かれたい
染め替えて羽織は過去を喋らない
捨てゼリフ吐いた余韻に負けている
芸術と言う人形の眉薄き

東大阪市　本多清人

快よい目覚め我が家の古畳
オフィスの日曜静かな雨となる
酔えば出る愚痴は世間に甘えとり
外タレを使うてCM国際化

大阪市　神夏磯道子

むし干しの喪服躾糸のまま
エプロンをつけ主婦になる安堵
義母が来る心の隅に重いもの
履きなれた靴は隋性の音を知り

和歌山市　津田与史

ある日ふと春めくリズムに乗ってみる
春宵をぽつねんと坐す固い膝
朧夜に石の仏は動かない
筋書の芸しか出来ぬ猿でいる

和泉市　西岡洛酔

赤い靴女の彩で街をゆく
夕陽真っ赤明日のファイトたぎる彩
爪の赤五十路も女虚栄する
妻の留守ぽとり蛇口のひとり言

和歌山市　若宮武雄

夢よもう一度人間ドック入り
澄んだ瞳の白い歯並は信じよう
偽りの足跡許さない渚
労りが欲しい手足でいる疲れ

大いなる心こぼれ陽から拾う
齢とった足　石ころを避けて行く
長生きが出来ます草のいい匂い
お互いに檻の中から手を伸ばし

竹原市　時広一路

語りつぐ過疎の炉辺の夜の哀話
あとは野となれ捨て犬の縄解いてやる
世間冷たき指話とは周囲気がつかず
交わりし蝶嫌いぬく花の揺れ

岡山県　出原敬一

雲溶けへメダカも唄う春の詩
白魚の話ものせて春の膳
その人と別れ遠かった帰り道
マンションに明治の母と神棚と

倉敷市　小幡里風

わが皺に喜怒哀楽を見し如く
男の目驕すベールか化粧水
嬉しさがかくせず男胸を張り
肥満体ふところ温い人にされ

呉市　槇田英詩

冬眠の恋もさめたか土動く
双方に傷つく愛と知りながら
まわるコマ誰の拍手もなく止まる
鍵かけた心へ春がノックする

堺市　高橋千万子

とんとんと昇進敵が多すぎる
立場上言ってる言葉冷たすぎ
裏のあるそのニュアンスを見逃がさず
お互に立場守って腹割らず

大阪市　河井庸佑

エンジンが植えるを畦で指図する
陽のあたるとこに座ろうとうろうろし
争いの嫌な男を牛が好き
生木裂く死あり夫婦のある限り

鳥取県　鈴木村諷子

黙々と政治不信のプラカード
春は曙味噌汁の香に浸り
色と香に心ときめく春霞む
殿愈無礼許す弱身の苦笑い

高槻市　福田丁路

日本語で聞かれて英語で教えとく
この美女の老醜の日をふと思い
悪党の庭にも花咲き鳥唄う
馬子唄で越えた峠のカーラッシュ

橿原市　岩井本蔭棒

重圧に屈し大根漬けの皺
無職われ明日は晴れよが晴れまいが
雑音を避けてトイレで句想練る
値上りへ抵抗散髪日を延ばす

出雲市　原独仙

諫早市　原田明春

馬鹿者と叱かれば遺伝と子の返事
平日は課長日曜は女房の指揮に入り
空に穴あければ公害なくなろう
あんま機は一〇円で小言いわず採み

大阪市　神谷凡九郎

いっかどの意見自我しか見ていない
今日もまた僕の喜劇の日で終る
徒食する身分が意見をリードする
その涙自分へ流す涙かナ

豊中市　戸田古方

晴続く阿呆でよかったなと思う
割れたのはたかが眼鏡のガラスでも
ピーナッツ何やお菓子のことでつか
蛍蠻やて私も出よう今日あたり

藤井寺市　児島与呂志

平凡な妻うぐいす色が似合う春
ちょっぴりの嫌味も気にして老いを知る
うら表無い人生の悔いつづる
大和川奈良の汚れも流れ込み

倉敷市　藤井春日

娘の見立て父二ツ三ツ若返り
スカウトの当座は条件よく守り
和服着て主婦の重みを見せている
自らを叱り励ます朝の靴

西宮市　藤村〆女

歓迎のキスもうれしく頬に受け
はじめてのムームー鏡の前に佇ち
晩鐘の余韻のなかで炎える古都
忘れえぬ人に逢うのも夢の中

島根県　西村早苗

錨おろす雲の流れを信じ切る
明日離郷雲の流れを振りむかず
平凡な顔に見つけた糸切歯
笑顔の中で凶器を抱いている女

倉敷市　稲田豊作

暴走族命は鴻毛より軽く
神棚に良人がヘソクリ預けてた
倖せは煩悩余生に尚燃えて
てこずるものに七十代の反抗期

松江市　舟木与根一

神経質な妻の鼾へ胸を撫で
猛犬の札から植込みつづくなり
居留守ではないねずみの走る音
外食の割箸折れる淋しい日

和歌山市　沢山福水

現実の迷いが易へすがりつき
親と子が同席をする趣味の幸
手放した山で子供はキャディする
三浪の書架古本へ気も腐り

倉敷市　能登原白水

耕した土三月の陽を浴びる
感情の起伏を知っている鏡
三月の風がもてくる沈丁花
駄馬となる父あり靴を光らせる

貝塚市　行天千代

すれ違い背に感じる鋭どい目
春の風秘めた心を燃えさせる
一人寝の忙しき夜を百合匂う
かずらきて化粧したらとふと思い

大阪市　津守柳信

温かい周囲に邪心解け続け
うたた寝をのぞく真っ赤な寒椿
アルバイトする進学を許される
通じない心と別な思いやり

鳥取市　河村日満

口裏をあわせて嘘の限りなき
硝子でも光る女の虚栄心
病妻の切り絵に逃げて日々無口
カレンダー梅の盛りの日と別れ

尼崎市　黒川紫香

草の芽が落葉を上げて春を告ぐ
陽当りに道を尋ねたのも座り
団体車春だ春だと通りすぎ
肩書も髭も落して安定所

松江市　岡崎祥月

66の退職春の風寒い
妻と趣味合わせ二人の城たのし
旅二人新婚気分湯に浸る
長男の夢を手伝う出資金

高槻市　若柳潮花

看板は男嫌いで売れている
ゆったりと盆地の春を鳶が舞う
沈丁花春の匂いを漂わせ
花追うて密蜂箱で旅をする

柳井市　弘津柳慶

どうにでもして呉れ底辺に生る
転職へ白髪めっきり増えて来る
庭に小鳥が来たよ公害のない住い
黙って妻の愚痴聞いてやる

氷見市　関美子

想い出の譜面流るは詩の笹舟
恋終る風に涙をあずけた時に
爛漫のあそこは水子始末室
からみ咳破れ心のボロ人形

伊丹市　樫谷漫柳

親の愛五等分するむつかしさ
爪を切るテンポに合わせ小言いう
当人は平気合格の幼稚園
西洋の愛を真似てるぎこちなさ

焼肉の煙の中へ客が来る　京都市　都倉求芽
髪洗う豊かな泡が風呂楽し
本当の心を知らぬ夜が泣く
春めいてくると財布が気にならず　大東市　土岐トク子
蕗のとう和えて酒酌むほろにがさ
陽春息子スイスより帰国
春一番待って居ました息子の便り
二年振り帰る息子の春着縫う
娘よ
耐えて今開く香気のかぐわしさ　東大阪市　市場没食子
北方領土返還ストはまだ聞かず
有言実行セールスノルマ背負て出る
月給も賞与も息子達に負け　宇部市　平田実男
結納の酒は父親には苦し
宝石が一層冷めたい美人にする
重箱の角はほじくってる税吏　守口市　野呂右近
背を流し合いわだかまり拭い合い
摑み度い藁も流れて来ぬ焦り
我が影と思えば子等を責められず　大阪市　室谷徹舟

二人目もオチンチンをつけ忘れ
素晴しいヒップパンタロン耐えている
黒い霧ピーナツ何を信じよう　鳥取県　清水一保
春闘で救えぬ庶民にストが欲し
肩の荷を降せば人生降り坂
雲の峰まだ日本は清く在り　東大阪市　竹中綾女
児の靴が片方落ちてる田舎駅
保安灯だけ点点と過疎の道
耳飾り背信の夜は光り失せ　東大阪市　桑原喜風
出世するそんな利巧は僕にない
高ぶった人の落目は惨めすぎ
難局も越えて社長に格がつき　神戸市　佐々木静泉
果立ちする子らよ後ろを振り向くな
虫たちの小さな夢をこわすまい
気が晴れぬ無言を妻は知ってくれ　和歌山市　吉野富子
天秤にかけた見合いでまだ迷い
ムードには弱い男でバーの捕虜
不況風延びた寿命をもてあまし　鳥取市　大塚豊生
雛流す川の瀬音に幸祈る

駅前を遊び場にした幼き日
ふた親の長寿の家系信じきり

兵庫県　大江秋月

無人駅の玄関　くもの巣はっていた
鈍行で聞く山陰の国なまり
ＮＨＫのドラマが売っている土産

大和郡山市　森田カズェ

つなぐから逃げだす術を考える
即席の味に姑馴らされる
傷心を癒してくれた川濁る

名古屋市　吉田水車

比らべるものが段々なくなる世代感
黙読をすればお経もたよりなし
これをしも商魂と言わんロッキード

笠岡市　松本忠三

まな板の鯉へ決断が鈍り
独酌へ女房すまして飯を食い
危険地帯教育ママが駈けぬける

姫路市　梅谿庵不酔

声変りしてこれからが親泣かせ
花嫁の評判荷よりも先に着き
鹿児島で札幌ラーメン喰うて来た

兵庫県　河原みのる

怒りのピーナツ
税務吏へ小雑魚としての怨み今
証人の禿皆ピーナツに似ておかし
日本中記憶喪失にしてしまい

大阪市　本間満津子

天職と決めて心にむちを当て
悩みもつことが生きると言うことか
長生をしてねと言われる齢になり

米子市　増田竹馬

孫の鯛やきくずれた顔で聞く受話器
長寿法答えて曰く和に如かず
石庭の鼓動を聞きに春の旅

岸和田市　植山武助

裏切りのように同期の友が逝き
みな年のせいにされてる痛みよう
無口な自分に自分も退屈し

八尾市　古川鶴声

児の世界知らぬ教育ママ孤立
音沙汰もなく来た旧友の若い妻
財閥に飼われピーナツ食う高官

奈良市　宮口笛生

沈丁花ブーンと匂う庭がある
嫁いでる娘も帰る春彼岸

母の墓小春日和に乾いてる

今治市　越智一水

縁側を母が独占する陽ざし
まちがいでない即売の点一つ
アメ玉も薬と思う春の風邪

東大阪市　落合思月

湯上りの女猥らな眼で見られ
節くれた指にダイヤ馴染ない
肩を寄せあつて金婚式真近か

東京都　山根白星

極楽を絵にする尼僧梅を持ち
棺桶のように納める冷凍庫
仮免許から失敬な排気ガス

岸和田市　葛城伊三郎

我が心磨けば何時かは子が光る
嘘ついてからは二重の気を使い
蒔かぬのに生えた草程根が深い

大阪市　神田秀峰

空洞の如き無憂の人多き
同じ椅子歯科と散髪大違い
気の合つた不思議嫌味も聞えない

小松市　馬場魚山

認め紛失官庁と話通じない
新しい暦に三林亡が目立ち

一息に喋べり冷静さにはじる

高槻市　山田季賛

別居生活今日も缶詰物になり
雑魚寝した山小屋が夢に出る
失なった何かを求めてひとり旅

仙台市　川村映輝

初孫へ鯉のぼり汽車でゆく
倖せも八分目位で満足し
梅干のおにぎり背負つて歩く幸

愛媛県　村上旭童

どう向いて寝ても背中に冬がいる
古傷の痛みへ梅の便り聞く
しもやけの具合も春を告げている

鳥取県　森田布堂

遭難のニュースの夜を雪しきり
五つ児の母のお乳は二つです
しぶちんの財布ゆるめるお人柄

唐津市　新岡回天子

陸橋が出来て遠のく前の店
催促に来ても口重も喋べらない
建国と言わず紀元節笑らわれる

若本多久志

忠魂碑へ三月十日の夕陽映ゆ
老いの花道会長の椅子無聊

物価高仏にすまぬ造花を立て
友情と別に商魂抜け目なく
どたん場の女の覚悟恐く聞く

尼　緑之助

ダニの科に属す揚げ足取るばかり
東光の気炎　ほんとの坊さん
久方の春光　安い葉つ葉だが
荒廃の山の葛に春走る
酒だけはどうにかあって夜の底

浜田久米雄

日本にある筈がない黒い霧
救急車ぼくの町から一人去り
成り行きに任せて朝寝まだ起きず
自分だけわかればよいというずるさ
八分咲きですよと妻のぼそり言う

本田恵二朗

パリラックスで老眼かくす古稀の坂
マスコミに文化連盟賞取り巻かれ
ラジオ対談古稀ちょっぴりとあがり気味
老妻が聞いてあきれた対談振り
テレビのクローズアップがあわれ老けている

正本水客

冬の摩周湖

突如　眼の下に摩周湖があり霧を見ず
氷結の湖　人寄せつけぬ色を持つ
カムイヌブリ（摩周岳）迫力のある影凍る
絶壁の底に摩周湖音を消す
斜里岳遠望　神秘の湖面息をせず

川村好郎

偽りをだんだん増やしてくる女
大自然を見つめてバラの自己批判
好きだから過去も歳も聞かずおく
音吐朗々弔詞を読んですぐ帰り

亡母五十年祭

五十年亡母に抱かれてこそのわれ

西尾栞

ナツメロヘバーのマダムの二重顎
口めくりの一枚に書いてある数字
ご鞭撻などとは就任した当座
洗礼の名は別にあり姉細し
賢妻の鎖絶ちたしつなぎたし

菊沢小松園

人伝てに聞けば胸病む夜の蝶
心機一転明日からやめる酒をつぎ
泥に咲く蓮とはゆかぬ世と悟り
捨てられて捨てたつもりで立上り
三枝の礼鬼の世界にだけ残り

麻生路郎物語（17）

―〝爆弾を抱いて来たる〟事件―

東野大八

川柳雑誌終刊号（昭和40年9月号）

川柳作家麻生路郎が、その全生涯を川柳に賭けた〝城〟は「川柳雑誌」であったが、その創刊号は大正十三年二月号でスタートし、昭和四十年九月号のナンバー四六〇号でそのタイトルの幕を閉じた。この間、戦時体制に協力して、三年九ヵ月の休刊冬眠期があるが発刊継続実数は実に三十八年四ヵ月間に渉っている。勿論このながい歳月の底には、人間路郎を押し包んだ風雪のなみなみならぬ試錬の一とときが数限りなくあったことは言うまでもない。

そのながい歳月が川柳を介して、路郎の身辺に去来した人間群像―あたかもそれはグランドホテルの回転ドアの景観にも似ていた。人来たりまた去り、その集散離合の時の因縁は、路郎生来の性格を反映して、哀歓多い川柳日記を倦むことなく浮彫りにしていった形である。

「昔は路郎の性格は非常に激しかった。情熱そのものの人で、自分が思っていることをちょっとも味つけなく、水増しもせずに他人にいう人でした。非常に感情家でもあった為に、言葉に飾り気がなく、腹が立った時にはまるで犬か猫のように私達にいわれることもありました。亡くなられた福田山雨楼さんの文章の中に『失礼ですが先生はちょっと子供のようなところもあります』とありますように、ちようど駄々っ子のようなとこがありました。それも自分の主義主張をあんまり潔癖に考えるからだと思ってます」（川柳雑誌・四六〇号麻生路郎追悼号〝思い出を語る〟・覆乃）

「路郎の癇癪（かんしゃく）は、正義を押し通さんがための情熱の発露である。（中略）路郎の情熱もし豆炭の輸切りとならば、たとえ八人の子をなすとも、私は離婚を申込むであろう」―覆乃記（昭和七年五月・川柳雑誌）

この山雨楼メモの同じ頁に

「昭和七年一月十六日八宮神社の神戸支部新年句会に講演〝爆弾を抱えて来たる〟相元紋太氏、社規により客員名簿から抜く」

とある。関西地元柳界の古参柳人の間で今も語り草のエピソードである。

ときに四十七歳の路郎自身にとっても、この件は生涯のうちでも忘れ難いワンカットであったらしく、「川柳雑誌」奉還号（昭和十八年十二月号）での〝苦斗四十年〟の中でかなり長いスペースを割きつぎのように記している。

―多くの句会へ出席したが、ただ一つ今でも遺憾に思う句会があった。それは当時健康を害していたにもかかわらず、押して神戸支部句会に出席した時のことである。その時の演題は今でも覚えているが「爆弾を抱えて来たる」であった。

当時「ふあうすと」誌の創刊間もないことであると思うが、紋太君からそれより少し以前に神戸支部を廃して支部の人々を呉れない

か、ということであったので、「ふあうすと」創立の趣旨を訊いてみた。それが我社の方針と一致すれば、支部の人達が行くと云えばやってもいいと思ったからである。

ところが刊行の理由は単に雑誌がないと淋しいから出すのだと云うのであった。だから大阪へも支部は設けない、というのであった。その後、そんなことを忘れたような顔をして、大阪へ支部をつくったが、それはどっちでもいいとして、ただ淋しいからと云うような理由では神戸支部を廃止することはできない。支部の連中で「ふあうすと」へ行きたい人があれば自由だが、我社としては「ふあうすと」以外の人たちを相手に川柳の社会化運動をやっていく必要があるので、支部は廃止しないという回答を与えた。これは勿論支部の人達を通じて談じたのである。こうしたいきさつのあった後の句会であるだけに、紋太一派の神経が尖っていたのかも知れないが神戸支部の句会へ出席した紋太君が私に食ってかかった事件が惹起した。

私の「爆弾を抱えて来たる」という演題の概容は今でも覚えている。それは多年川柳の社会化を提唱してきた自分としては、今日漸く川柳が社会的に認識せられてきたことを欣ぶものであるが、川柳人の数のおびただしく増加するとともに、それだけ尤も危険な時期に遭遇しているともいえる。従来川柳を社会が認めなかった反面には川柳人自身の不勉強も勘定に入れなければならない。折角認められてきた今日。川柳人の増加によるレベルの低減によって、再び文化文政時代の堕落期に堕ちねばならないということは、寒心すべきであると警鐘を乱打したのであった。そして川柳への精進は死ぬまで続くのであるし、殊に至って地味な努力を続けていくのであるから、その覚悟でやらなければならないことを説いたのであった。

然るに紋太君はこの言葉をどう聞きちがえたのか食ってかかった。そしてその後の「ふあうすと」誌上で読むに堪えない罵言雑言を敢てした。支部同人はこれに対し大いに憤慨した。そして反駁文を書いてこれを発表して呉れと迫ってきたが、私はその支部同人が紋太君と目と鼻のところに住んでいるので、今後の摩擦を思い、支部同人を抑えてこれを葬ってしまった。ところが支部同人の幹部は私の親心が判らず遂に支部を去ってしまった。

私はこの事件直後、試みに金沢でも同じ講演をやってみたが、金沢では何等の事件を惹起せず、むしろこころよく聴いてくれたのである。私の手許には今でも支部同人の書いた反駁文が残っている。私はどこまでも柳界の平和をのぞんでこのことを発表しないつもりであったが、「ふあうすと」誌に残るあの一文が後世の柳人を誤解せしめるのを惧れるためここにこのことを書いておくことにした。

由来紋太君は謙恭な人として知られていたが、この事件に対してあの下劣極る言辞を弄されたのをみて、この謙恭について疑いをさしはさむようになったのである。人間誰でも慣れると先輩に対する礼を忘れ勝になるものであるが、従来川柳人の一部にはことにそれが甚しかった。紋太君の如く、誰にでも謙恭な人であると思われている人でさえそれがあるのであるから、他にそんな人があるとしても不思議ではないのかもしれない。

路郎の紋太観はこのあとも続いているが、冗長にわたるので割愛する。とにかく路郎の〝苦闘四十年〟の四頁にわたる全文中、この爆弾事件の回顧がかなりの比重を占めている点を注目したい。話に筋目を通す路郎の烈しい気性を示す好資料とも筆者は考える。

高鷲亜鈍（藤村青一）あてに椙元紋太が昭和三十五年八月八日付であてた原稿紙十三枚（四百字詰）の手紙が筆者の手許にある。支障なき部分を、所持者の許可を得たので紹介しよう。ただし、路郎の発表した上記の爆弾事件については直接何もふれられてはいない点が首尾を欠くが、紋太と路郎両者の心情的ニュアンスの相反するところが興味深い。長文にわたるので、必要個所の抜すいに止めておく。了承願いたい。

—まず最初に路郎・水府両氏のお言葉ですが、川柳雑誌社の門下だ、ということは私も意外です。門下でも会員でも社友でもなんでもありません。（筆者註—これは紋太書簡の冒頭にある字句で、この件の質問に対する回答のための執筆のようだ。原稿用紙のマス目は活字発表に備えてのあとが明らかだ）

ただ親しく接近した時期はありました。昭和四、五年前後だったと記憶しますが、二、

三年間に亘って句評会に出席したのですが、その頃の川柳雑誌に毎号連載していますから外見上殆んど内部の人間に見えたかも知れません。当時、水府氏も紋太は川雑側だと私を警戒していたかも分らぬほどでした。

けれど、句評会への外部からの出席者というだけの関係で、他に何んの意味もなかったのです。こう云ってしまえば、大変水臭いことになるので私は好みませんが、門下か会員かと関係を問われるとこの言い方になる。

ただ私としては、路郎氏を尊敬し、川雑を愛し、私自身の勉強になることも多大であったので、何や彼やをこめて、他意なく神戸から手弁当で毎月休まずに通ったことでした。

その頃までの関西柳界は、只今と違って主幹だの会長だのと云う制度的なものがなく、至ってのんびりしたものでした。東京柳界が先輩を先生と敬称しているのを内々笑っていると云った状態で、関西には先生の呼び方をしなかった時代で、至って平民的だった。

（中略）私は時々書いていますが、私には誰某の門下だとか、何門の出身とか、誰先生に師事したとか云うことがなく、多くの人の文章や句が先生であったのだから、今から始める人も自分で読んだり見たり聞いたりして自分で道を開くようにしてくれというております。そんなことで特に路郎氏の門下だとか番傘に師事したとか云わなくてもいつも両氏を尊敬し、私の方が後輩であることを年頭においておりますので、改って門下ではない、会員でないと無関係を云いたてることも私の本意ではありません。（中略）

川柳界の最初の先達である久良伎、剣花坊その他当時の人たちは、柳多留を唯一の教典としモデルとし、師として始めたのです。そして庶民的な味を尊重して、それを川柳の誇りとしたものです。それが東京では、以前からの雑俳界の風潮や気風が断ち切れずに続いていましたから、宗匠的な慣習も同時に抜け切れませんので、忽ち先生だとか門下だとかいう観念が結びついてそういう制度が自然に植えつけられたものと私は思っています。

このあと紋太の川柳人生の自己経歴が綴られている。それを手短かに要約しておこう。

大阪の菓子店に丁稚奉公中の十七、八のころ投句などでひとり楽しんでいた。十六歳で父を喪ったので小学校もろくに出ていない。そんなことから、初めて句会に誘われ、その庶民的な空気と味がわが身にしみて、本気で川柳をやる気になってしまった。「番傘」が創刊されたころ、当百さん宅の句会によく通い、出席率もよく、句も文も「番傘」へ発表し「ある時は客員といった名をつけられたが先方の好意によるもので、つけたりやめたりが二度ほどあった」大正六、七年ごろ「つばめ」が廃刊したので、一枚もの二つ折を印刷したのがきっかけで「柳太刀」を創刊する。

「そのころには神戸にも四、五の柳社が出来、柳誌も出ていてお互いに競争意識を張り合っていましたが、私はどの句会にも出ていた。それが四、五年するとだんだん疲れが出て、どの柳誌も気息えんえんといった状態となり、各社の有志や浪人組がなんとなく、気分一新を望むようになったのです。

そのほか、いろいろの原因や動因がありまして、昭和四年六月から「ふあうすと」が出たわけです。私が四十歳の齢でした」

「この私が神戸柳界で最年長者であったことと、いつも世話を焼いていたということが親しかった番傘へも入らず、川雑と親しくしても会員にもならずに終ったのではないでしようか。古参の青岸（仲間の）が熱心にやっていたところ、神戸は大阪の力をからず独立してやろうと、いつも云っていました。これは私が大阪の句会へ出ることを嫌っていたのかもしれません。その言葉が私の頭に植えつけられているのか、大阪に限らずどこでも何んでも頼りにしてはいかん。川柳人は独立独歩自分の力でやるべきものというのが私の主張です。ですから私は、弟子だの門下だのと――もし私を師のように云う人があれば説教するつもりです」

路郎も紋太もともに事業欲に燃えた四十代である。一方が三十年計画をたて川柳の社会化運動を川雑を拠点に日本中へ拡大しようと気宇雄大に構えれば、一方は十六歳で世間に出た庶民的人間川柳派の師弟制度をあくまで否定する、神戸中心の文字通りの「ふあうすと」という握り拳主義。爆弾事件とは帰するところ、その両者の異和感が、導火線の役割を果した、剛と柔の対決――そうもいえるのではないか。

青木迷朗

誹風柳多留廿五篇研究

—（十丁）—

八木敬一・西原亮・入江勇
紀内恒久・鈴木黄・清博美
青木迷朗・室山三柳・岡田甫

174　**焼餅を下女ハちひさく路次でやき**

八木—下女の焼餅。下女なりに路地で小さく焼餅をやく。路地、小さくが下女の焼餅のわびしさを現わしている。

青木—賛。礎稿の「路地、小さくが……わびしさを現わしている」に全く同感。とすれば、相手を下男とするよりは、独身の若旦那若しくは番頭、手代などとした方が、わびしさがなお生きてくるか。

室山—下女をあつかった句としてはめずらしく佳句。

岡田—大声を出したり、派手に武者ぶりついたり……が出来ないのが下女の恋。「小さく」が生きている。

175　**二十八からふんどしが白くなり**

八木—遊女年明の句。吉原の遊女は二十七才で年が明け、二十八からは今までの緋の湯文字に替え、白いものを使用。

身が儘になるとふんどし迄白し　六四・28

青木—賛。白い湯文字になった事で、憂き川竹のつとめから開放されたのである。

岡田—同。

176　**江口の遊女持りやうのちゝれ髪**

八木—「持りやう」は、持つべきもの。携帯用のもの、所有の用品。「ちぢれ髪」の女は風味よしという俗信がある。

江口の遊女は普賢様の化身だといわれるが、遊女である位だから、もともと好色でちぢれ髪であった。というようなことか。釈迦のちぢれ髪にかけて印度の仏の化身であることを暗示するか。持料に持前の意ありとすれば、「生れつき」位のことであろう。

ふげい様わるく変んじてやたらされ　末三・7

青木—賛。普賢菩薩は釈迦如来の脇仏なので、ちぢれ髪であろうと想像したのであろう。

けしからぬさいど江口でさせ給ひ　末二・31

江口にて仏も一度緋ぢりめん　三五・39

西原—贄。ちぢれ髪の女は『色道禁秘抄』に「ちぢみ髪の女も妙陰なりと天下一統いひ習はすも、血多きより髪ちぢめば、必ず陰戸も佳ならん」とある。

入江—贄。

遊女とはあんまりはでな化身なり　二六・1

岡田—同。

177　**はんじやうな土地箱入の水を呑**

八木—「箱入の水」は、『川柳江戸名所図会』から引用すると、「玉川を十三里先の羽村で取り入れて流し……承応二年、玉川清左衛門、庄右衛門の二人が、苦心を重ね大木戸まで通水、翌三年、大木戸から虎の門まで、四角な木管の伏桶として通水完成した」とあって、玉川上水のこと。

玉の水桝で斗ってわける也　二八・12

はんじやうさ升ではかった水を呑　三四・32

はんじやうな土地とは、江戸のことをいったのであろう。

岡田—同。

178　**ごばんの上へまつすぐに雨ハ降**

八木—「碁盤」は、主題句の場合、京の町をいう。神泉苑で小町が雨乞の歌を詠むと、碁盤の目のような京都の町に、まっすぐに雨が降ったというのであろう。

西原—贄。京都は四方が山に囲れているから、雨が真っすぐに降るのだろうか。

室山—京都の雨というだけで、雨乞には無関係であろう。「まっすぐに」は、西原氏のいわれる地形もあろうが、碁盤の目の直線からの語であろう。

清—同。雨乞に関係なし。

岡田—室山氏説の通り。

179　**七月六日黄白の鯖が出る**

八木—徳川時代には、七月六日、御三家を始め諸大名より、七夕の御祝儀として、使者を以て鯖代の金銀を将軍家へ献上したと云う。

竹売をよけよけ御使者行キ　二六・8

岡田—同。

180　**目出度さハ月諸共にお使者出る**

八木—若君ご誕生であろう。それを知らせる急ぎのお使者が馬で出発する。「月諸共に」は、謡曲「高砂」の文句取りであろうか。「高砂やこの浦舟に帆をあげて、月もろともに出汐の波の」とある。

おさとへの使者ハ月もろともに出る　四九・2

室山—文句取贄。

入江—同。「月諸共に」は、月の出と共にお里方へ出る。

差汐と共に御使者ハ三太夫　一〇五・20

清—文句取りの部分は、特に解釈する必要もなかろう。

岡田—同。

黄銅六角ボールトナット
及び特殊換物全般
合資会社 西出螺子製作所
大阪市天王寺区空堀町八番地
TEL (761) 三四五二～四
夜間 (762) 四四〇八

中島生々庵
中島小石　共著

生と死

主幹ご夫妻の句画集「生々楽天」を三部作として発表することにしました。すなわち第一部は、「刊行記念句会」第二部は、「句画展」、そして第三部は、「刊行記念パーティ」。句会の若本多久志氏の柳話は〝葉隠れ〟余話でしたが、これは次の機会に発表。

「生々楽天」刊行記念

本社三月句会から

中島生々庵

今月の本社定例句会を、私共夫妻のために「生々楽天」刊行記念句会として頂き、お忙しいところをご参会下さいました事を厚く御礼申上げます。大変恐縮して居る次第でありますが、私共にとりまして一生一代の嬉しい日、感激一ぱいに生涯忘れる事の出来ない最良の日となるでありましょう。

世の中でよく昔から言われる如く才子多病とか、天は二物を与えないとか言われます通り、私共のように些か、お脳が弱い人間にとって、有り難い事に、才能の方は頂けませんでも健康だけは人並以上に恵まれまして、大した病気を知らぬままで、昨年七月私は満77才の喜寿本年七月に満78才、昔の数え方ですと来年の正月には80才となり、小石も本年三月10日70才の古稀を迎えることになります。

忙しい家業のかたわらで、三人の子供が成人することばかり念願して居る裡に、ふと気付きますと、これはこれは、この三月二十日に金婚を迎えることに相成りました。文字通り兎鳥匆々、何時の間にかこのような歳になって終ったという感じであります。

人間の脳細胞は、三億とか四億とか言われて居りますが、生れてから五、六年で脳細胞の数は最高となり、その後は減ることはあっても、増えることはないと聞いて居ます。即ち五六才までは偉らいお方も私のような者でも脳細胞の数は余り違いがなく、その脳細胞の数はどんな偉い方でも一生涯増加しないと言うのです。問題は脳細胞一つ一つを結んでいる紐です。この紐が逞しく発達するか、ひょろひょろであるか、結び付きが固いか粗雑であるかによって、偉い人と凡人との間に恐ろしい迄のランクが出来て終うわけであります。ハタチ過ぎると並みの人、というのが私共凡人に与えられた評価であります。

そうした点から考えて見ますと生々庵が80才に近くなった今日、恐らく脳細胞の分量も働きも若い頃に比べて半減か又はそれ以下に減少しているのは明らかですし、脳細胞を結

びつけている紐のゆるみ加減も大変なものとなっていることも明らかであります。それが現在、何とか総崩れにもならず、外見だけは一応整った形を見せている事の出来るのは、何と致しましても、周囲からの皆様方による力強いご鞭撻、ご支持によるものであると私自身深く反省しながら、しみじみ有難く感謝しているものであります。

殊に、このたび「生々楽天」の発刊に就きましては、まるで夢みるような気持ちで、二三日前も夜中ふと目がさめて、いろいろ越し方の事を考えて居りましたことは、丁度卵を生みっぱなしにしておいて、一向にその卵をあたためて鶏鳥に育てようとの努力をしない或は全くそうした愛情などには無関心な言うなれば不届き千万な、親鳥の姿が即ち私自身の姿ではないかと気付かせて貰ったのです。そうした姿を見るに見かねて、何とか秩序を整頓して見たらどうかと、お力添えを頂き、火事場同然のあばら小屋から、あちらこちらと少しでもものになりそうなものを拾い集めて下さったのが、この「生々楽天」である次第であります。何と有り難い御厚情ではありませんか。出来上った「生々楽天」を初めて見た時に、もう胸がつまって終って、何とお礼申上げていいか言葉を知らなかったのであります。

その上まことに申訳けなく存じますことはこのように美事にお化粧もし、豪華な衣裳を着せて頂いても、所詮は山家の猿でしかないことです。

到底ご恩返えしは出来ないまでも、せめてこれからの余世をいくらかでもお役に立てたらと念願しているばかりであります。そういう意味合いから、世間でよく言われるような、わしは、もうこれで何時死んでも思い残すことはない等とは申しません。今年の年頭にあたり

喜寿と古稀まだ贅沢な願いごと

という句が出来ました通り、皆様のご親情をいい事にして、第二の「生々楽天」第三の、「生々楽天」をお願い申上げたいと厚かましくも胸中にたくらんで居る次第であります。

お礼の言葉としては雑駁な措辞となりましたがお許しを願って感謝のご挨拶と致します有り難うございました。

華やかな画展

橘　高　薫　風

中島生々庵、小石句画展は、金婚を記念して、三月十六日から二十一日までの六日間、心斎橋の画廊カワチで開催された。しーんと静まりかえった街の画廊のたたずまいとは異り、この会場は、お祝いの千客万来、華やかな雰囲気が溢れている。心斎橋ロータリー寄贈の鉢植えの花がフロアに豪華に据えられている。この句画展も句画集「生々楽天」と同じく、三人のご子息達のご孝心による。だから会場入口には、お孫さんの慶子ちゃんの絵「おじいちゃんおばあちゃん」があり、参会者を和やかな気持にさせる。長男一彦氏の七言絶句、一彦夫人の作品、三男孝之氏の写真もあって和気靄々の感が深い。特別出品には故木村杏園画伯、直原玉青画伯の名品、川柳では、故麻生路郎先生の

踊りの輪月ははるかに忘れられ

番傘主幹近江砂人氏の、

手の届かぬ人生と知る和気夫婦

などが出陳されている。

さて、生々庵・小石ご両所の作品であるがこれら数十点は、毎年阪急百貨店で開催される直原玉青画伯指導の「青玲社展」に出品されたものが主となっている。直原画伯は、「私の見るところでは、正直いって絵は小石夫人の方が上手かも知れない。」と生々楽天の序で云っておられるが、生々庵主幹の画題は、やはり男性的で、筆勢も力強い。小石夫人のは優雅で装飾的である。十六日の初日、川村好郎氏と私は先陣争いをしたのだったが来合わせた好郎、酔々、天笑の諸氏に、生々庵・小石作品の天位を選んで貰ったら、

好郎―秋（生々庵）土塀（小石）
酔々―万灯篭（生々庵）土塀（小石）
天笑―冬湖（生々庵）月見草（小石）

右の通りで、小石夫人の墨絵の塀は最も好評だった。私は、軍鶏、静物（生々庵）、蕨、花瓶（小石）などに見入るのだった。

この展覧会での今一つの見ものは、昭和三

十年から始められた夫妻合作の元旦試筆である。生々庵主幹が唐紙に書初めをすると、小石夫人が絵を添えられる。絵があって画賛をするのと逆なのであるが、今年で二十二本の軸になっている。その年代のご夫妻のご様子心境が表れている。表れていないものにも、ご夫妻の深い思いが潜んでいるようである。

昭和三十四年には、

句画展・右から二人目生々庵主幹・四人目小石女史

初孫の産声うれし屠蘇の味　生々庵

の句に小石夫人は、でんでん太鼓の絵を添えられている。昭和三十三年十二月二十四日に初孫の滋郎くんが誕生したばかりのうれしさが躍如としている訳である。三十八年には

老先生と呼ばれ慌てぬ歳になり　生々庵

絵は、兎年に因み兎が餅を搗いている。

昭和四十二年は

尉は古稀媼は還暦わか緑　生々庵

で今年と同じにおめでたい年だった。

喜寿と古稀まだ贅沢な願い事　生々庵

今年の元旦のこの句に、私は、路郎先生の還暦の時の作品、

六十一まだ情熱は燃えに燃え

のような熱っぽい心情がしずかに息づいているのを汲み取るのであった。

「生々楽天」刊行記念パーティ

半世紀

有信新之助

いま、かりに、生々庵御夫妻のどちらかに行きずりの人が、声をかけたとしたら「ちょっと、おじいさん」とか、「そこのおばあちゃん」と云う人は、恐らくいないだろう。

昭和五十一年四月十一日、心斎橋大成閣の五階大広間の、金婚記念パーティの席に、川村好郎氏の先導で、定刻に顔を見せられたお二人に、「なんとお若い！」と、八十七名の参会者全員が、思ったに違いない。過去半世紀に亘り、川柳に絵画に小唄舞踊と、一致した趣味で培ってこられた、豊かな教養と情操が、八十才七十才に手の届くお二人の、老を感じさせないのであろう。

橘高薫風氏の、たどたどしいとさえ思える、素人っぽい司会振りが、初めから会場の固さをほぐして、舞台に設けられたお二人の席から、「天皇皇后両陛下」と野次が飛ぶほどの、貫録が漂ってくる。

番傘の平賀紅寿氏、川柳文学の堀口塊人氏の祝辞があり、生々庵主幹には宮西弥生さんの手で、小石夫人には野坂つき子さんの手で花束の贈呈が行われ、拍手の内にマイクに立った主幹より、余生の一日一日を大切にして白寿を目指したいと、希望に溢れた謝辞がのべられた。

若本多久志氏の音頭で乾杯の後、会食のはじまった、和やかな雰囲気のなかで大陸川柳の大井正夫氏、時の川柳社の三条東洋樹氏、平安の福永清造氏と、祝詞がつづけられたが短詩文芸の世界では、名作をのこした著名な作家たちは、人間的には破産者といってよいような、生活環境のなかで、秀作が作りだされてきたが、趣味性豊かな円満な生活環境のなかで、川柳に絵画にと、秀れた作品をものされてきた御夫妻をみると、天は二物を与えず、という諺を、訂正しなければならぬとい

う、堀口塊人氏の言葉に代表されるように、一致した趣味により、充実した結婚生活を、半世紀に亘ってつづけてこられたお二人に対する、共通した羨望の言葉で埋められていた。

蓬莱高砂松竹梅鶴亀福禄寿と、めでたく大広間にひろげられた円卓から、祝酒に頬を染めた参会者が、一人ずつ進み出て、祝吟が披露される拍手に、感激した主幹が、再び謝辞に立ち、御本人の言葉通り、いまだに誰も耳にしたことがない、追分の前唄を唄われたが、長年小唄で鍛えた、豊かな声量に、拍手が湧きあがった。

宴たけなわになって、お二人が手をとり合って、各テーブルへ挨拶に廻われたが、その後姿にさえ、老を感じさせぬ張りが溢れていた。

本来なら、ここらで隠し芸の出る処だが、竹原から御夫妻で参会された山内静水氏が、御自身の考案による、川柳の朗詠を披露され短歌の朗詠にみられる、冗長さがなく、ひきしまった感じで、路郎先生の、川柳は情熱である、という教えを、一途に実践してこられた、氏の熱意が、会場の隅々まで響きわたっていった。

フルコースの中華料理も終りに近づいてくると、誰の頭にも浮んでくるのが、菊沢小松園氏で、仇名の通り閉会の辞が、軽妙洒脱な名調子で、会場を湧かせて万歳三唱となったが、金婚御夫妻へは三条東洋樹氏が、日川協へは傍島静馬氏、川柳塔へは福永清造氏の音頭で、異例の万歳九唱に支えられて、生々庵主幹御夫妻の白寿への道が拓かれていった。

私のような初老の若輩にとっては、気の遠くなるような人生絵巻である。

祝　吟

（順不同）

手の届かぬ人生と知る和気夫婦　近江砂人
日本一似たもの夫婦鰻谷　平賀紅寿
夫唱婦随ひそかな婦唱夫和もよし　福永清造

金婚・喜寿・古稀・生々楽天のご夫妻

生々楽天かげの努力はいぶし銀　同
相舞の比翼連理の華麗なる　西尾　栞
寿にあやかる酒の甘美なる　若本多久志
祝盃を挙げよう次は米寿喜寿　川村好郎
陽の当る道はるけくも五十年　菊沢小松園
お芽出度や金婚喜寿古稀記念句集　大坂形水
桜咲く生々楽天とばかりに　橘高薫風
生かされて生きてこれからこそ夫婦　山内静水
金婚の坂もしっかり手をつなぎ　山内房子
連れ舞の袂ゆたかに古稀と喜寿　山川阿茶
三一の花と咲いたる生々庵　服部明陽軒
金婚と喜寿へ句集が彩を添え　金井文秋
生々楽天金婚の宴映ゆ　宮尾あいき
生々楽天夫婦につづく花の道　河野君子
柳人の憧憬句画集「生々楽天」　西川誓二
生々楽天ただただ生がいを教えられ　菊田いさむ
金婚の塔が聳える花の雲　小浜　牧人
眩しさよ生々楽天座右に置く　三井　酔夢
生き生きと小石も踊る絵筆かな　有信新之助
三重の喜び祝う今日の宴　村田　瓢太
祝金婚生活と趣味へ手をつなぎ　若柳　潮花
生々楽天はなやかにもいぶし銀　西　いわを
晴るる今日生々楽天みちみちと　戸田　古方
金婚の句画集いろどる相聞歌　傍島　静馬
老松の連理の彩にあやからむ　安藤寿美子
句集よし絵も良し夫婦仲も好し　岩本雀踊子
よろこびの輝く笑顔あるばかり　野村太茂津
同じ道絵筆の先に幸あふれ　垂井千寿子
金婚の喜寿かがやきをます歩み　若宮　武雄
金婚のまだまだ若い蔚と姥　竹中　肖二

ご夫妻の左から・紅舟・清造・東洋樹・塊人諸先生

金婚の年輪あふれる絵に賛に　竹中　綾女
如才ないひとの喜ぶ筆のあと　浜田　儀一
喜寿達者やがて米寿白寿まで　落合　思月
喜寿と古稀乗せて金婚船万歳　斎藤三十四
金婚へ二人三脚恙なし　桑原　喜風
お二人の倖飾りたい掛け軸へ　横地　雅風
金婚は因果応報仲がよい　那須　鎮彦
還暦と古稀かとまごう御両人　荻田川狂子

金婚へベターハーフで出た句集　奥谷　弘朗
金婚を祝う輪が打つドラ響く　神谷凡九郎
拍手盛ん今日人生の三幕目　本多　柳志
柳情が生々楽天乾盃す　児島与呂志
趣味までも夫唱婦随の五十年　小川　恒明
真実一路二人の彩で鈴が鳴る　藤村〆女
金婚を銀やしんじゅが囲み居り　樫谷　漫柳
椿寿まで生々楽天つるの舞　高杉　鬼遊
生々と桜楽む夫婦かな　香川　酔々
耐え抜いた生死一如の夫婦坂　大路　美幸
金婚にムードが欲しくなる今宵　高橋　夕花
喜びの限りはてなしめおと旅　内海　幸生
白寿へと順風はらむ喜寿と古稀　和田維久子
人生はかくとありたし句集読む　高橋　操子
三博士産んだ浪速の名医かな　上林　加仙
生々楽天へう月の良い日なり　福浦　勝晴
先生の偉業寿ぐ今日の幸　葛城伊三郎
御夫婦の姿私に置きかえる　植山　武助
生々楽天二部合唱の虹は冴え　天正　千梢
先生と同じ堺に住める幸　八木摩夫郎
おめでたを四つ重ねた酔い心地　笠原　吸江
祝金婚画展句集と彩をそえ　高橋千万子
仲のいい夫婦に鈴がひかりたす　野坂つき子
幸せの絵へ金婚の筆を添え　藤井一二三
金婚の席でも功をゆずり合い　河内　天笑
金剛力士阿形像と金剛力士吽形像を切り抜いた額入りの力作　阿万　万的

★

ご出席芳名録　（敬称略）

若本多久志・川村好郎・傍島静馬・高杉鬼遊・児島与呂志・西尾栞・橘高薫風・本多柳志・藤村〆女・高橋夕花・河野君子・西いわを・大坂形水・板尾岳人・藤井一二三・河内天笑・不二田一三夫・小浜牧人・三井酔夢・若柳潮花・植山武助・正本水客・高橋操子・菊沢小松園・小谷葉子・神谷凡九郎・落合思月・桑原喜風・横地雅風・野坂つき子・那須鎮彦・大井正夫・野呂右近・樫谷漫柳・荻田川狂子・小川恒明・奥谷弘朗・福永清造・三条東洋樹・西村芳川・高木幸太郎・城一舟・有信新之助・村田瓢太・福浦勝晴・葛城伊三郎・上林加仙・宮尾あいき・金井文秋・斎藤三十四・阿万万的・西川誓二・竹中肖二・竹中綾女・野村太茂津・若宮武雄・垂井千寿子・和田維久子・伏見茂美・高橋千万子・納史葉・市場没食子・八木摩天郎・菊田いさむ・戸田古方・山内静水・山内房子・平賀紅寿・天正千梢・安藤寿美子・内海幸生・大路美幸・笠原吸江・堀口塊人・山川阿茶・川口弘生・香川酔々・堀口欣一・服部明陽軒・浜田儀一・宮西弥生・定金冬二・前田芙巳代。

謝辞

中島生々庵

本日は、川柳塔社常任理事の有志の方々が西尾栞氏を世話人代表として生々庵、小石夫妻のために生々楽天発刊記念パーティを企画

し、皆様にお願い致しましたところ、何かとご多用のところをご来賓様をはじめ、かくも多数ご出席賜わりまして、夫妻にとりましては勿論のこと、私共家族の者にとりましても、まことに有難い極みで、生涯忘れ得ない喜びであります。厚く御礼申上げます。

又併せて何かといろいろお骨折り下さいまして、この盛会を企画して下さいましたお世話人様方に、この席を借りまして、心から厚く御礼申上げます。

顧れば五十年と一口に申しますが、医者の方から申しますと、俗に世間でも言いますように、大学は出たけれど、でありまして、五十年前に卒業したばかりでは、西も東も判らぬ全くのお坊っちゃんで、寧ろ、卒業すれば直ちに専門課程の研修が控えて居りまして、それぞれの教授のきびしい指導が始まるわけであります。私の場合、約四ヵ年の研究時代を過ぎ学位を授けられ、やっと開業という運びに相成ったわけでありますが、その間、結婚、長男誕生、私自身流感から急性肺炎で九死に一生を得る騒ぎ、やがて戦火に焼かれ無一物、なんとか疎開地から復興の緒についた27年に母を失う等々私事に亘る、いろいろの曲折がありました。

そうした五十年の思い出の中にも、昭和12年麻生路郎先生門下として親しく路郎先生きびしいご薫陶の下に30年間お仕えし、先生ご他界後川柳塔社発足以来10年余、この川柳生活四十余年の思い出こそは、最も熾烈なものであるのであります。従いまして、本日ご参会下さいました大先輩や同輩柳友の方々に、ご指導やご支援や、いろいろご迷惑をおかけした事は数限りもない次第であります。生々庵の今日あります事は全く皆様のお力添え、ご親情によるものであると考えますと、感慨一しおであります。

キザな言葉のようですが、万感交々湧いて胸に迫る思いとは、文字通り全く私の現在の心境であります。言い現わし方が拙くて充分意をつくし得ませんが、何卒、感激に打ちふるえている私の胸中を御賢察願わしうございます。

ただ甚だ残念なことには日暮れて道遠し、何等ご恩返えしも出来ないままに、余世が消えて終いそうである事であります。

路郎先生ご在世の頃から、始終お戒めになったお言葉は「足踏みをするな」という事でしたが、私は川柳塔が発足するに当り、私の所感として「背伸びをするな」と自戒の言葉を巻頭に載せました。この、「足踏みをするな」との路郎先生のお言葉と「背伸びをするな」との私の自戒の言葉を表裏一体として今日まで、どうやらたどりつきました。一方、星野哲郎が言ったように「倖せは歩いて来ない」のであります。倖せに向って最後の最後まで前向きの努力を続ける所存であります。それでは、私にとって幸せとは何か。それは生き甲斐を感じるという事だと思って居ります。それでは生き甲斐とは何か。人によって違いましょう。児玉誉志夫の味う生き甲斐もあれば、月見草はなぜ夜咲くのかを探究し続ける老学者、斎藤美知博士の生き甲斐もあります。私にとっての生き甲斐を只今具体的に申上げる、まとまった考えを持ち合せませんが、私のような愚鈍非才な者にとりましては今日一日を明るく感謝にみち乍ら、そして足踏みをせず、背伸びもせず「幸せは歩いて来ない」を口ずさみながらの日暮らしを私の余生の生き甲斐と致したいと存じます。もし許されるならば、米寿までも百寿までも、贅沢な願い事を忘れない白髪のじじいでございます。この後とも、どうぞよろしくお導き下さいますよう、こころからお願申上げます。

しどろもどろで謝辞などとは、ほど遠い老の愚痴になりましたが、ご寛容賜りまして、舌足らずの拙い言葉の中から私の胸の中に燃えひろがっている感銘の一部でもおくみとり下さいましたならば、幸甚これに過ぎるものはございません。

有り難うございました。

（カメラ・板尾岳人）

「生々楽天」刊行記念を祝して

（順不同・敬称略）

金一封　番傘川柳本社
同　ふあうすと川柳社
同　時の川柳社
同　高橋操子
同　奥谷弘朗
同　天正千梢

厚く御礼申しあげます

五濁抄

川村好郎選

金だけの世にも思える淋しい日　大和高田市　岸本豊平次

故里へ錦は要らぬ山と母

後ろにも帰えれずさりとて急な坂

生きた海老煮る指先は夜叉になり　富田林市　定金冬二

蟻の列　死に美しいものはない

裁かれに行く男にも天がある

かたつむり小さな音は持っている

わが愛に気付く枯野を抜けてから　松江市　梅本登美也

冬眠の蛙ゆすぶる蕗のとう

金庫背に万策つきた腕を組み

遮断機が待つたをかける救急車

うれしい日ひとこと多いことも言い　兵庫県　高橋近江

耐えて来たしるし鮮か咲く椿

師や親の愛の鞭とは受取らず

思い出が仕舞い込まれた里の家

自制という泉へ英知が湧いてくる　和歌山市　松原寿子

上げるもの無いから笑顔のプレゼント

胸底に抱いた愛の視野は春

断崖へ佇つ身を責める風の鞭

耐えた日の日記は余白のままで閉ず　西宮市　杉浦婦美子

孫のスト玩具売場で座りこみ

喚問へお呆けどこまで逃げきれる

胃袋に我慢させてる美容食

送ろうかそんな語を待つ肩の雪　和歌山市　西山幸

愛の鞭欲しくて悪女になってみる

石仏の孤独を民謡慰める

紬着る故郷の匂いに触れたくて

傷心の両手へ母の温み滲む　宝塚市　とんぼ改め　吉田笑女

さあ春だ春だ　はずむよペンダント
ピンボケの写真が遺影となった事故
仕舞風呂主婦一日のこりほぐれ
ひもじさを知らない児等の食べ残し

東大阪市　崎山美子

職場での恋にかかせぬ合言葉
出世するタイプかおとぼけ堂に入り
とぼけてはみたが手ごわい妻の勘
うどんだしまたまた母の独壇場

島根県　松本文子

過去形の日記秘かな意地を持つ
愛憎は土にかくしてふきのとう
炎の色コンパクトに閉じこめる
灰皿に空しい祈り溜めている

柏原市　小谷葉子

心にもなく通せんぼして淋し
封筒の厚さで愛を計るのも女
美しい話ばかりが通り過ぎ
完敗の日から微笑み絶やさない

和歌山市　桑原道夫

夜深し癒えぬ心を舐め尽す
愛の闇釣糸垂れている男
涙する瞳いよいよ星光る
花の香に酔うて心のファンタージァ

岸和田市　池田露子

人の振る鈴で済ませる初詣で
古日記焚けば心が炙られる

竹原市　鈴木かつ子

咲いて散る花へ我が身をふりかえり
うれしくてメガネが邪魔になる涙
その先きは言うなと妻が目であいず

富田林市　中村優

あじけない世だなあ七福神も消え
名産を鞄に詰めて帰途たのし
ハンカチの嘘も波止場が消してくれ

島根県　飯塚虎秋

俎板の春を刻んで嫁の詩
愛一つ支えの汗の共稼ぎ
球根のいのちは動き春を待つ

和歌山市　樫村ふみよ

間取り図へひろげる夢の目を集め
憎愛の念持つたまま珠数をくり
子をけなすお口の裏に愛こぼれ

弘前市　小山内貞男

少年の夢を育てる虹が映え
ねむれぬ夜詩の心で吹雪きく
立春に春を信じて雪に堪え

羽咋市　三宅ろ亭

面と向かい断ることの難しさ
浪人の眼にうつろ花吹雪

ロッキード狭い日本を掻き回わし　鳥取市　有田鹿の子

春一番今日の旅路を狂わせる
外出は遺影の夫へ留守たのむ
山鳩の寂し亡夫の眠る丘　寝屋川市　柴田恵美子

億の金にむらがる罪のにくしとも
シャッターを閉めて情のない玄関
人だのみの坂は息ぎれせぬように　豊中市　高橋古啓

一輪に咲く優しさと烈しさと
創るもの壊すものにもある響き
公平な夢空いっぱいに星がある　八尾市　納史葉

別々の色を選ってる夫婦箸
音の無い鎖が私を重くする
腹立ちの音でまな板叩かれる　八尾市　田中紀美代

面白い嘘でまるめた日の陽気
情熱の果ての雨足かも知れぬ
ふつつかと言うてはソツのない女　竹原市　大島花炎

合格へ母に安堵のうす化粧
おみくじの花へ紅梅揃い咲き
退院の胸張る空へ飛行雲　尼崎市　小林文月

桜咲く兄上逝きし頃のごと
碁に少し負けた座敷がなつかしく
大臣の代理の代理に彰を受け　河内長野市　井上喜酔

定年前やっと人間丸くなり
貞女よりたまには妬いて欲しい妻
音痴でも我が家の風呂は遠慮せず　今治市　渡辺南奉

眠れない訳を振子にからかわれ
折鶴の数折鶴もくたびれる
ダイヤなど似合わぬ妻の健康美　豊中市　安藤寿美子

おふくろと言う愚さに居てたのし
絵にならぬ妻で太平無事な日々
時刻表ここであの子に会えるのか　西宮市　井上のぼる

たとえばの話に罠が置いてある
平凡な暮しの庭に花が咲き
控え目な男にチャンス振り向かず　大洲市　宮尾みのり

励ましてやるだけ受験の子へ無力
喪の家と知らずつばくろ巣を作り
聞く耳は持たぬ自信がいて困り　大洲市　横田放人

電話では若やいで聞く妻の声
共感の拍手だ強く長くする
旧友の訃報に晩酌減らされる

尼崎市　中谷利美

言うばかり聞く耳もたぬ民主主義
片言のような会話で足る夫婦
さり気なく愛たしかめる五十妻

唐津市　桧垣岩光

理性もう限界にきた子を叱り
無器用を見破られたかハンダ鏝
柔肌もたるんできたなサロンパス

唐津市　三浦ひろ坊

大物に嵌める手錠は小さすぎ
大物を逃がす切り札診断書
証言台うそ発見器付けてなし

今治市　今井松花

小型だが児玉誉士夫が此処にも居
恋猫の声に季節を知らされる
乱れ箱覚悟の出来た帯が落ち

今治市　真山国彦

三世有る信仰持ってこせつかず
さて遣るとなれば家柄無視出来ず
本人に似て遅蒔きの風邪で候

大阪市　那須鎮彦

陽だまりで雀は何をうわさする
ヤングパワー生かす社長も又若い
あやまちを許すと蝶は高く舞い

寝屋川市　江口度

死神をふりきり小石にけつまずき
動けない木にも生きてゆく権利
宣伝の効果は粗品ばかり減り

山口市　高崎雀声

美容院出てきた妻はとまどわせ
恋し合う二人にちぎれ雲ばかり

高槻市　山田スミ子

再度の手術父ちゃんよくも耐えてくれ
父ちゃんの病気ひとりの電気釜が噴き

新見市　吉田落猿

三浪へ廊下の音は高すぎる
百年の歴史母校の銀杏知る

美唄市　青木仙人

屁理屈を並べまともに負けない気
新しい時代の波は大きすぎ

新宮市　西尾功

新世帯女の夢が活けてある
幾星霜古城支えた石に触れ

羽曳野市　麻野幽玄

女房に言えない意地で義理を欠き
分ってる事言わせたい夜もあり

羽曳野市　岩橋双虎

市川さん浄化の土産頼んます　大阪市　欄　蘭

珍らしく都会の空の飛行雲

お小言は片方の耳で聞き捨てる　備前市　武内雅堂

小銭尚尊し赤電話かけるとき

進学の重荷に妻がラッパ吹く　大阪市　新川貞祐

人妻と別れてドラマ裏返す

喜びも頒けるすべなく隔て住む　名古屋市　大林曲ん手

手の届く部屋で独りの孤に耐える

滝を見て滝に打たれてみたい罪　須賀川市　平栗金太郎

無駄のある人生だから面白い

夜業終えラーメン音立てて食い　岡山県　池田半仙

母に手を引かれて弾むランドセル

限界の魅力寂しい厚化粧　姫路市　大原葉香

株分けの蘭に一芽欲しい鉢

天地人の法則生花に教えられ　尼崎市　大垣たもつ

一万円札くずして財布ふくらませ

足を組む女で目立つ終電車

三本の架橋へ四国の貧しすぎ　大阪市　堀口欣一

立春の食卓に乗る瘠せさんま

髪なぶるおんな欲求不満なり　西宮市　朝山千世子

触れ合うて言語にならず瞳が燃える

芸の張りいつも心に彼が居て　岡山市　時末一灯

廻り道した再会へ酒を撰り

私見ですがと結局は決になり　八戸市　安田紘

善と悪その中ごろでゆれ動き

母としては泣かず女として泣き　泉佐野市　大工静子

五ツ子へ我事如く気がはずむ

新調は主人同伴迄残しとく　東大阪市　野村白風

晩学の窓に一鉢ヒヤシンス

長女次女三女に配る母の味　堺市　栗本藤持

アルバムに若き日想う日向ぼこ

世を去れば速い流れの幾周忌　鳥取市　勝山紫宏

晴れやかに預けこっそりと引き出した

豪遊のつもりの積立惜しくなり

スピーチ終るまでのがまんさ目をつぶる　新潟県　高野不二

花嫁の化粧の下の笑い顔
：　鳥取市　北野天人

お灯明吹いて消したをとがめられ
趣味が仲とりもち再婚ふみきらせ　堺市　堀畑日々子

いねむりのサンドイッチマン何の夢
癒えた身に菜の花漬の新鮮さ　岡山市　井上柳五郎

ふと気づく愛想笑いに自己嫌悪
二児の母スタイル気にせずよく肥り　滋賀県　柚木踏草

まんざらでない顔女の虚栄心
省略の好きな男で酒を酌ぐ　八戸市　島田昭治

みんなには好かれる割に金持たず
なるようになれと思っては見たけれど　倉敷市　藤原健二

気のゆるみ聖徳太子見逃さず
印相で変わる運とも思えぬが　広島県　原田篤史

朝寝ぼう我家の妻のスト時間
となりの子うちの玩具でよく遊び　橿原市　西本保夫

言いたくも無い退職金の額
ベテランのボクしか雑用出来ぬ筈　松江市　黒目大鳥

勇退の決意心身洗うごと
倖せを築く人生ねばり勝ち　鳥取市　岸本無人

雪解けの雫が大地を目覚めさせ
春蒔の種が届いて雨を待つ　新潟市　市川一峯

主任制なりたい者もなかに居る
地獄へは億万長者の行くところ　羽島市　伊藤静枝

いち早く我が家に春を黄水仙
いけばな展家元だけは見落とさず　熊本市　有働芳仙

アドバルーンあげて不況の風を切り
看護婦は泣いて居れないご臨終　尾鷲市　渡辺伊津志

温かく笑わせている苦労性
追いつめに来たなと思う瞳に出合い　東予市　小山悠泉

ライバルをほめる余裕のある笑い
事なかれ主義一言を差し控え　鳥取市　田中佐智枝

鯉のぼり二人目からは放っとかれ

煩悩の断ち切れぬ身で道を説き　鳥取県　加藤茶人

判官の拍手重たく背で聞く
吉報と念じ恐々取る受話器　大阪市　牧　ときを

言わないでよいこと言うて悔残り
うとうととまぶたに若い日が浮かぶ　島根県　高見鐘堂

毒舌も口ほどにない妻の前
となりまで行くのに鏡のぞく妻　大阪市　松本甫久路

見えすいたお世辞は何かを探る肚
さりげなく断るつもりが断れず　今治市　蔦本昌道

一喝が無口な父に出たノルマ
貸すと言うことば短かく充たされる　岸和田市　池田香珠夫

おそるおそる指先触れてみるミンク
感情のたかぶるままに採る受話器　唐津市　岩下照沖

今朝の雨土の中まで春告げに
古寺巡るバスを仏の顔で乗る　唐津市　山下勝一

甘いことずくめの底に穴があり
ロッキード枕高いは庶民だけ

交渉の相手は裏まで知りつくし
愛読書睡眠薬となる疲れ　唐津市　岩崎実

不運にも鴨解禁を知らず飛び
ラジオもう余生を納屋に引き籠り　唐津市　田中紫浪

母と言うだけで子の顔知らぬまま
打ち下ろす拳を善意とも知らず　唐津市　田口虹汀

三人の局で局長いつも留守
堀の水アヒル一家が春にする　今治市　伊藤一郎

心臓が許す範囲で怒鳴り付け
もう一と月老人春を待つ会話　今治市　古野伶人

天地の気受けて雑草先ず芽吹き
風待ちの港さびれた常夜灯　今治市　大本バット

花道もない母の晩年
家計簿もつけぬ亡母にて赤字出ず　今治市　園部正則

帰郷に雪靴の良さ母の味
春風に土筆一番に目をさまし　尼崎市　駒村岳麓

島根県　安達潮音

静養の春日一歩強く踏む　大阪市　平井露芳

病院の待合室で会う旧知　島根県　岩田三和

電線に足を取られて凧憤死　高知市　竹崎寛

古い柄保つ個性美城下町　倉敷市　高山みどり

信じているだから朝顔咲きました　松江市　岡崎雪美

消毒器まで新型の台所　寝屋川市　福富隆子

玉葱がしみたと子には言っておき　橋本市　森脇善彦

特価品ばかり獻立て市場籠

あと三年そんな悠長な石がない　出雲市　藤井晴月

過去ながす明日の灯りがほしいから　今治市　原田琲珈里

口開けて寝る妻だから安堵でき　唐津市　筒井朴竜

怪物の正体視たり二枚舌　東大阪市　西条文子

待つ身には春の風でもうらめしく　橋本市　岩倉天彦

洋服で和尚出かけるとこがあり　下松市　徳光秋人

すれ違う人にすれ合い出勤す　豊中市　出口セツ子

春の夢覚めて我が胸抱きしめる

近作

今治市　月原宵明

片ちびの墨に個性のあからさま
とっときの嘘が飛び出す桃日和
たんぽぽはあるか無しかの風に乗り
一升壜逆手にもって花曇り

岐阜市　市川鱗魚

喪服なら作り笑いが似合いそで
濡れてみる若さ牡丹のような雪
妥協点妻の鍵穴探し当て
立膝の女寄付ならお断り

東京都　池口呑歩

馬鹿になりきれずに涙する日記
馬鹿でないつもりの馬鹿の面の皮
分析をすれば色気の多い馬鹿
どうせ馬鹿だからと神に委せきり

今治市　長野文庫

音もなく朝霧忍びよっていた
滝を得て蜀築き変える欲の堰
日帰りだから切り捨てる奥の院
悲しげな顔で乳牛しぼられる

百人一首と川柳 (23)

富士野藜馬

六八　三條院

心にもあらでうき世にながらへば
　こひしかるべき夜半の月かな

この御製は「例ならずおはしまして、位など去らむと思し召しける頃、月の明かりけるを御覧じて」と詞書して「後拾遺集」にのせられてある。

三条天皇は、冷泉帝の第二皇子で、諱は居貞（おきさだ）、御母は、太政大臣藤原兼家の女超子である。寛弘八年（一〇一一）三十六才で即位、長和五年（一〇一六）病気のため、四才の後一条天皇に譲位して、太上天皇となられた。そうして翌年出家せられたが失明せられ、四十二才で崩御になった。おいたわしい御生涯であったようである。また内裏の炎上に二度も逢われ、右の御製もその心情が素直に詠出されている。

川柳は、その文句をとって、

心にもあらでヲヤよく来なんした

と作られている。

乙テ（一四〇9）

六九　能因法師

あらし吹く三室の山のもみぢばは
　たつたの川のにしきなりけり

この歌は「永承四年（一〇四九）内裏の歌合に詠める」と詞書して「後拾遺集」に載っている。この時六十七才であった。

能因法師は、俗名を橘永愷（ながやす）といい、遠江守橘忠望の子であったが、父の兄の肥前守橘元愷の養子となったと伝えられている。はじめ官吏になりかけたけれども、のち出家して融因といったが、また改めて能因といった。

摂津国の古曽部というところに住んでいたので「古曽部入道」とも呼ばれた。生来和歌を好み、藤原長能に師事して、当時の歌人として名高く、勅撰集にも多くの作歌がのせられて、また数々の著書もある。没年はわからない。

「古今著聞集」巻第五に
「能因は、いたれるすきものにてありければ、
　都をばかすみとともに立ちしかど
　　秋かぜぞふく白川の関
とよめるを、都にありながらこの歌を出さんこと念なしと思ひて、人にもしらせず、久しく籠り居て、色をくろく日にあたりなして後「陸奥国の方へ修業の次でによみたり」とて、披露し侍りける。」
と、能因の逸話が書かれてある。これによって多くの川柳が詠まれている。

白川を見てきたふりで黒い顔　　柳水（七三12）

歌は顔書物は腹を日にさらし　　瓦合（四五2）

顔と腹和漢詩哥の種を干し　　雨旦（六二21）

——中国の郝隆虫干の日に「我は腹中の書を曝す」と庭に出て腹を干した

定斎屋のやうに能因日にやける　　春風（七六9）

黒くなったは白川の歌のため　　杜螺（七六4）

白川の名歌で出来た黒ン坊　　曲水（九四16）

日に焼けたわけは能因ひしかくし　　山吹（一二五39）

白川でさらした顔は黒くなり　　寿山（一五九17）

白川の名歌能因黒くなり

歌人は居ながら日に焼けうそをつき　古柳（二六29）

能因はドリヤ昼飯と首を入れ　雨夕（三四21）

能因が窓へ出ぬ日は田がしめり　飄枝（一三七33）

しる人が来ると能因窓をたて　佃（七九5）

能因は白川までの首つかれ　（安七信6）

能因が窓も建きる横時雨　赤子（一四〇13）

能因が顔を取こむにわか雨　佃（一四五4）

能因の首唐なすとならんでる　雪成（四五19）

松島をきけば能因口ごもり　礫川（八八15）

細布を問われ能因こまる也　一笑（八八27）

わらおくひまでは能因気がつかず　未学（二九2）

笠紐のあとに能因気がつかず　（六24）

能因はいけまじまじとわらおで来　文和（一六四14）

いでもの見せんといふままに能因　（拾五13）

雨譚（一九ス9）

都では花見白川では月見　（二一27）

能因は川どめなどのうそをつき　（三三6）

一戒破る能因が旅の笠　三輔（一四六26）

妄語戒破り能因一首詠み　玉章（四一6）

霞から秋風長いうそをつき　（二八33）

霞から秋風まではながい嘘　清涙（一一二20）

孕み歌能因十月ほどこもり　柳下（一二三25）

能因もかすみの頃はまだ白し　夢輔（一〇八18）

また能因は、永承五年（一〇五〇）伊予の大三島の大山祇神社で、この辺の百姓が旱魃で困っていたので

あまの川苗代水にせきくだせ
天くだります神ならば神

という雨乞いの歌を作り、奉献して祈った。その効験あって、三日の間大雨が降った。とこれも著聞集に書かれてある。

和歌の徳天苗代にせき下し　佃（八一13）

米の値を下げたも二人百へ入れ　若竹（三一15）

――も一人は小野小町

このお礼に、餅を搗いて、能因に馳走したので、それから餅のことをカチン（歌賃）というようになったといわれ、

雨のふらぬ前は餅とばかりいひ　高砂（二二41）

餅の代口にとよく練て一首よみ　長物（一〇四33）

下戸向の歌を能因一首よみ　山路（篇四14）

なお文句取りに

歌がるた下女がすわれば嵐吹く　（安四智8）

七〇　良遅法師

寂しさに宿を立ち出てながむれば
いづこもおなじ秋のゆふぐれ
（後拾遺集）

良遅法師の家系や経歴はわからないが、洛北大原に長らく住んでいたようである。

源俊頼（七四）が大原を通った際、この人の家の前で、馬からおりて敬意を表したと、藤原清輔（八四）の書いた「袋草子」に伝えている。

川柳は、さみしさとよんでいるから

良遅に見せたき廓の夕景色　佃（一四〇10）

さみしさに宿を立ち出二朱はまり　（天四義2）

『前号訂正』P41中段一行目「遍路」は「遍昭」

愛染帖

正本水客選

玉手箱むかし煙は白かつた　豊中市　高橋　古啓
芯のないローソクにした宣誓か
美しい川に溢れた過去があり　大阪市　神夏磯道子
出かせぎの夫が叩くか雨の音
子の影がのびて私に寄りそわず　和歌山市　野村太茂津
本流に乗れば捨て身も眠くなる
跳ね返る若い言葉に影がない　島根県　堀江　正朗
コツコツと春がノックをしていった
ひとさまに見えない風の顔が見え　青森市　工藤　甲吉
石を積む一つ一つを霊として
握る一方てのひらをかなしませ　島根県　錦織　文子
巣立つ子へ父の母の巣がゆれる
惰性から逃れたい白い足袋　八尾市　高橋　夕花

桜散る　ごめんなさいも言えぬまま　島根県　小砂　白汀
もう二度と都の灯にはふりむかぬ
昔なら埴輪で終る女たち　和歌山市　沢山　福水
開き直られて常識あわて出し　羽曳野市　麻野　幽玄
遠足の雨を知らずに寝ている子　山口市　高崎　雀声
よく晴れて雲雀も我も多忙な日　唐津市　岩下　照沖
生きている箸も茶碗も音たてて　島根県　堀江　芳子
歩をゆるめ沈丁花の香をくぐる　大阪市　宮尾あいき
春霞見えないものを追いつづけ　大阪市　河野　君子
潮退いて海苔の匂いが陽の目みる　和歌山市　若宮　武雄
新しい恋がうまれた日記帳　堺　市　高橋千万子
畳替え自分の位置を見失う　枚方市　宮川　珠笑
荒れ海へ吹雪まっすぐ突きささり　尼崎市　黒川　紫香
春一番妻はうるさく笛を吹く　神戸市　小浜　牧人
すぐ金に見積る人の眼鏡ずる　松江市　梅本登美也
春の橋渡れば　ついて行きたくなる　富田林市　和田維久子
八尾市　宮西　弥生

生涯を捧げる阿呆の面かぶる　島根県　小砂　白汀
悠々と流れる深さに音がない　今治市　大本バット
恋人を替え喫茶からスナックへ　松江市　岡崎　祥月
大宮の無限　自然の色を抱く　大阪市　西出　一栄
厚き辞書　春の日射に拭われる　東京都　山根　白星
首を吊る仕種してみる　誰も居ず　宝塚市　吉田　笑女
熱の児のうつつ泣いたり笑ったり　鳥取市　河村　日満
底辺にいても天使のような子の　高槻市　若柳　潮花
浪人結構もう眼の前へ古稀が来る　東大阪市　竹中　肖二
出しきった力が腕に甦える　東大阪市　竹中　綾女

初心者歓迎
短期達成
費用低廉
内容充実
規則書呈上
大阪市南区大宝寺中之町一
誓得寺内
関西奇術教室
TEL (271) 七一二八

目的地に着いて気づいた日の違い　大阪市　欄　蘭

盃を廻し親しき無礼講　倉敷市　藤原　健二

一家言あるギャンブルの過去を秘め　岡山県　出原　敬一

父の胫しやぶって春へ辿りつく　備前市　武内　雅堂

濁流に洗われ黒い霧が消え　岸和田市　池田香珠夫

朝市は廃すべ一つなく仕舞い　岡山県　長尾　保

白い杖　地球をノックして進む　橋本市　森脇　善彦

釣具店釣る気の客に向けた竿　今治市　原田　一風

面会に来て女子寮の生臭さ　今治市　真山　国彦

緑なら緑へ春の陽が渡る　唐津市　田口　虹汀

傀儡師どの人形も出ししぶり　今治市　原田琲珈里

結論を急ぎコーヒーブラックで　和泉市　西岡　洛酔

一億の一端　僕も生きている　富田林市　岩田　美代

雛の客　桃の生毛の如き顔　和歌山市　津田　与史

春の灯がともり雛の目生きている　今治市　月原　宵明

靴下を脱いで集中するつもり　岡山市　船越　洋之

列島が疾る終点のない軌道　八尾市　大路　美幸

玄関になるほどと言う趣味を見せ　倉吉市　奥谷　弘朗

妻がいて娘もいて　もひとつ気にくわぬ　神戸市　佐々木静泉

おどけても笑いが来ない日のピエロ　和歌山市　桑原　道夫

迷彩を施し小心巣に籠り　太田市　藤田軒太楼

村芝居　幕の下から差し入れし　今治市　伊藤　一郎

不勉強買いかぶられてとまどいす　八戸市　島田　昭治

ゴム長の母は絶え間もなく動き　岸和田市　池田　露子

娘育てた甲斐あり見舞賑やかに　今治市　古野　伶人

割烹の母の従順さがしみる　倉敷市　能登原白水

あの頃と同じミスしてる子を眺め　伊丹市　樫谷　漫柳

還暦後苦楽の味も煮つめられ　岡山県　池田　半仙

つまずいたものを見下す懐手　島根県　飯塚　虎秋

片翅は喰いちぎられて夜の蝶　倉敷市　高山みどり

みの虫の眠りを醒ます陽の温み　堺市　栗本　藤持

賄賂まで高度成長　世が世なり　今治市　蔦本　昌道

銀行のランク預金へ低姿勢　今治市　越智　一水

倖せを白髪になってからつかみ　和歌山市　西山　幸

抽出しへ過去閉じ込めている焦り　高槻市　山田　季賛

積木崩している喧嘩している　松江市　岡崎　雪美

実家へ来て腰をあげない娘をせかし　貝塚市　行天　千代

スケジュール楽よと友が誘て呉れ　京都市　松川　杜的

朝夕を眺めて塔が詩にならず　八戸市　小泉　紫峰

偶然に合った歩幅に運ひらけ

熱心に投句しておられるんだから一句でもという心を押さえて今月も20名以上の全没の方が出た。安易に一句抜けることより自分の句の可能性を試すことに喜びを持って欲しいと思う。

投句先きは

〒546　大阪市東住吉区湯里町1の25
（電話大阪・703・3046番）
正本水客宛

締切毎月十五日―（一人三句以内）

路郎賞
川柳塔賞

候補作品中間発表

自　五一年一月号
至　五一年四月号

路郎賞候補作品

（到着順）

若本多久志

汗キラリ男の素顔極まれり　三宅　不朽
黒を着る女　炎を抱かない　宮西　弥生
アルバムの国旗を父は語らない　浜野　奇童
灰を掌にのせて人間など思い　工藤　甲吉
ひっそりと病む老犬の瞳が痛い　玉置　重人
散るもよし一期一会の秋の彩　水粉　千翁
昂ぶりを消す洗濯を白く干す　嘉数千代香
角いつかとれて思想が岐路にたつ　河村日満
一粒のカシの実に満つその抱負　鈴木村諷子
和と書けば角がとれてく墨にじむ　中川滋雀
食べたいものが食膳にのっている倖　佐々木静泉
色も香も秘めて尼僧の悟り顔　草深　酔升
人間のまわりに人間多すぎる　不二田一三夫

正本水客

ポケットに密柑が一つ落着かぬ　谷垣　史好
鶴老いて白一色の死を賜う　羽原　静歩
人生を夕陽の如く沈まんか　若本多久志
はぐれ鹿もしや革マル派かも知れず　村上　春巳
富士の山だれが画いても富士になり　高杉　鬼遊
花束を買うとき男負けている　三宅　不朽
貧乏を覗かれ銀行から帰る　大路　美幸
飛んでみて空退屈なものと知り　川口　弘生
鱸をみな捨てたく女髪洗う　錦織　文子
自慢そうにこっちも風邪だと電話口　若林　草右
かたつむり病むなよ殻を負いきれぬ　堀江　芳子
海の蒼　吸殻一つ捨てかねる　柳原　静香

菊沢小松園

七人の敵あり君子になりきれず　中村ゆきを
新聞の隅々までも冬になる　高橋　夕花
冷戦の膝とも知らず猫が来る　森田カズエ
花好きのそれほど花の名を知らず　高杉鬼遊
糸切れてから凧自由です　宮西　弥生
水吸うて水吸うて古木同士なり　岩田　美代
夫婦して積木のゆれをかばい合う　岩本雀踊子
花束を買うとき男負けている　三宅　不朽
先生と呼び先生と思ってず　若本多久志
埋れ木となる父親で死なんかな　小浜　牧人

西尾栞

産声の早速親をてこずらせ　村上　春巳
役立たぬ正義感ならもっている　柳原　静香
年金で食ってるそうな死んだそな　原　独仙
投げ入れの花の素顔に訓えられ　小幡　里風
退化する男の髪は長かりき　岩本雀踊子
青年の人生感に撫然たり　三井　酔夢
乱丁と落丁が一冊になる夫婦　不二田一三夫
神主でさえも神様には逢えず　大矢　十郎
北山杉気ままなポーズ許されず　傍島　静馬
妻の座にいつしかL寸着て座る　阪上十止庵
フィクションしてた自分へ眼を閉じる　神谷凡九郎
新バッジつけて企業の走狗となる　稲田豊作

水割りでちいさな不安消して寝る　野田素身郎

川村好郎

音もなく流れる水に似て夫婦　都倉　求芽
信念を通す重さで浮き沈み　水粉　千翁
完璧な駒組み自ら動けない　谷垣　史好
つまずいた石の言葉を聞いている　嘉数千代香
王子さまのように内孫寝ているぞ　岩本雀踊子
軽い日も重い日もある義理を下げ　江城修史
持つべきは子供とおもうそうおもい　川端　柳子
下り坂小さな花が眼にとまり　高杉　鬼遊
ひとつぐらい心見る眼にしてほしく　戸田　古方
隅っこがよく稼いでいる赤電話　川口　弘生
傷口が癒えると人を又信じ　三井　酔夢

橘高薫風

くちなしの花に介錯しいられる　三井　酔夢
この町の素顔のひとつ螢とぶ　三宅　不朽
鉢巻をしたが根性にはならず　水粉　千翁
樫の実の落ちて大樹の夢捨てず　林　瑞枝
枯草の匂いを愛の果てとみる　高橋　夕花
虫のようにからっと乾いて死にたいな　有信新之助
核保有広がってゆく癌に似る　西森　花村

元日や場末の如き湊町　谷垣　史好
庭石の苔を老醜とは言わぬ　稲田　豊作
スポーツは万能鞄持ちとなり　小浜　牧人
遺児の手の中でみかんが重くなる　川上大輪
滝つらら山の男は汗が落ち　板尾　岳人
ぬいぐるみ温い童話のつめてあり　林野甦光
腹のたつ時もえくぼはふたつある　嘉数千代香
この上のなき安らぎは我が枕　工藤　甲吉

川柳塔賞候補作品

戸田古方

善人と知ってか鬼が離さない　谷岡　芳枝
おみくじの凶を今ごろ思い出し　安藤寿美子
灯を消せば蟻が上手にかくせそう　渡辺南奉
怪獣の傑作竜として残り　池田香珠夫
闇よりもあかりに揺ぐ影こわし　高橋　古啓
枯れたふりして雑草は春を待ち　鈴木かつ子
つまずいた石は可愛いいたまご形　大江静子
お早ようと豚が正しくささやいた　安達潮音
敗けないと力の限り土の色　森脇　善彦
人づまとなにを掟にして逢おう　定金　冬二

小浜牧人

我が道を行けば矢も降る槍も降る　安藤寿美子

てのひらの温みも投げたお賽銭　山田スミ子
運命線どこかに幸福駅もある　柚木　踏草
ついてくる犬へ小石も投げられず　吉田とんぼ
さざなな波の一つ一つにある夕陽　松本甫久路
愛憎の果てにナイフが置いてある　納　史葉
秋に咲く桜をふいと憎くなる　小谷　葉子
浮草も流れてるうち花が咲き　山下　勝一
明るさを表直な嫁が持って来た　鈴木かつ子
決意する目と目に言葉などいらず　松原寿子
目が覚めると今日も鼓動が鳴っている　吉田　落猿
人前で見せた涙はすぐ乾き　清水　元
石一つ置いて庭師に日が暮れる　江副　二牛
心中の鬼にぶつける豆がない　中塚　喜甲
八桁の電卓何をはじこうか　川上　富子
再会を信じて胸の火は消さず　池田　露子
人並みに生き一輪の花でよし　大林曲ん手

大坂形水

石仏の頭を避けるぼたん雪　桑原　道夫
地下街を出ることは出た田舎者　原田　篤史
大阪へとんぼ帰りの小企業　岩田　三和
階段に噂が落ちている団地　納　史葉
ドライな音たてる大仏修理殿　柚木　踏草
咳払い一つで会議の流れ変え　市川　一峯
お早ようと豚が正しくささやいた　安達潮音
毛糸玉ゆるゆる解ける幸せよ　高橋　古啓
どん底で二月の草の匂い嗅ぐ　芝原　路春
風紋のいのち朝あり夕があり　飯塚　虎秋

—同人吟—

秀句鑑賞

——前月号から——

菊沢　小松園

埋もれ木となる父親で死なんかな

小浜　牧人

老手よく省略の妙を心得ている、子を思う親ごころがこの簡単な十七字のうちに隠されている諦観した確固たる自信も窺える短かいこれだけの言葉の裡に深い思藻の果の親ごころを見せつけられた思いがする。

愛憎が卍巴に夜がくる

工藤　甲吉

愛は憎しみであり憎しみは愛である。愛は憎の変貌であり、表裏一体もとこれ同根である。この意味では夜の嵐もまた愛の現れと見るべきか、本当の愛は曲がりうねってやって来る。直線の素直さは望むべくもない。

つくばいに残る流人の水鏡

香川　酔々

従来の川柳と違ったものをこの句は語り掛けていると言っても決して新しがりの突飛さはない、地に足を附けて一歩馳け出さんとしてじっと四辺を見詰めている、そんな俤をそこに見た。曽て新国劇の創始者沢田正二郎は一歩先んずれば大衆に離れ同列に歩めば大衆に没れる、半歩先を歩むと宣言して半歩主義を称えた。

この句を見てこんなことを思った。確かに示唆に富んだものを持っているけれどそれが良いか悪いかは今後の問題である。

総入歯痛んだ頃をなつかしみ

平田　実男

子供の頃よく歯を大事にするよう年寄りから言われた、何であのようにしつこく言うのだろうと不思議な位いだったが老境に入ってよく判るように判る、随ってこの句の心境も判る。歯の痛む苦しさも今は懐しい、川柳ならではの叙法もユーモア味もある。

争いを避けて付き添い小さく居り

津守　柳信

争いは痴話でありその因は附添いにある。その構図が無ければこの句の意味は浅いものになる。句主の苦労性は何も彼も知って居て然も平静にさらりと創られている処、第三者の鑑賞に任せて是れで判るかいと北叟笑んでいる。小面憎くいばかりである。

寒雀どこで寝てたか朝告げる

児島与呂志

昔の寒雀は餌の少ない辛い季節であったが今の街の雀にそんな心配はない。

案じてた雀が無事に戻って軒端に朝を告げている。貧しい庶民の生活にも通じる情景である。

かたつむり病むなよ殻を負いきれぬ

堀江　芳子

働ける間はどうにかなっても、患えば目も当てられぬ庶民は、絶えず嵐の前の葦である心安らかな日とてない。併し蝸牛はまだ借家住いではないと蔭口。

人形は笑いつづけて抱かれます

川端　柳子

人形の見方に依って明暗二様に取れる、ウーマン・リブの時代の強い女性の奔放さにも取れるが、人形の古いイメージからは暗い生活の女の日々にも取れる。要は中七の笑いつづけての解釈の問題である。

恥部かくす無花果の葉となりてより

西　いわを

太古は神の恵みとして神性視した性も今は金儲けの手段として使われる。墜ちたがやはり神の手は行き届いていたのである。

婦警さんはっしと止める十二トン

溝口はやを

背後の威力は女ながらも一挙手で十二屯車もはっしと止める。中七の適切さを買う。

—水煙抄—

秀句鑑賞

—前月号から—

谷垣史好

鍵束にいつかは叛く鍵もある

定金　冬二

昔は、こんなに鍵を持ち歩く暮しではなかった。人間が信じられない世の中だから鍵束の鍵がふえていくのだろうか。人間よりも鍵を信じて生きている現代人。でも鍵の方は人間が期待しているほど従順ではあるまい。

鍵束を振るとチャラチャラと鳴る軽薄な音あれは人間を嘲っている音かもしれない。

八桁の電卓何をはじこうか

川上　富子

電卓業界の販売競争のすさまじいことは、ご承知のとおり。他社のシェアを一%でも食おうと新機種の開発に、コストの切下げに鎬を削っている。おかげで我々も、小型で高性能の電卓が手頃な値段で手に入るようになった。それにしても八桁というと一千万という計算単位である。とても庶民の生活には縁遠い。

まあ折角、買ったんだから貯金の複利計算でもしてみますか。

雄鶏の早起き近所に詫びて行き

岸本豊平次

東の空が白みかける頃、どこかで鶏の鳴く声。のどかで平和な一日の始まり。しかし、この頃のように家が建てこんでくると、風流を解さぬ人種もまぎれこんでくる。雄鶏のときの声を公害と思う者もいるだろう。近所づき合いに気を使って、出勤の道々、詫びて行ったというのである。ほんとに住みにくい世の中になりましたね。

約束の場所に他人の顔で待ち

西山　幸

〝他人の顔〟がこの句のポイントであるが約束の場所に行った「私」が他人の顔を装っているのか、或いは私の「相手」が、待っている私の顔を見て他人を感じたのか、いずれであろうか。他人の顔と思ったのが実はそれが本当の顔であるかもしれないのだ。

ドライな音たてる大仏殿修理

柚木　踏草

奈良の大仏さんの屋根の葺き替え工事が始まった。大仏さんにはお気の毒だが、頭の上で毎日やかましい工事の音、それを〝ドライ〟とは、うまく表現した。足場を組み、大屋根の上で立ち働く人達を仰ぎ見ると、改めて大仏の巨大さが思われる。

長生きをしてねと伜村を捨て

市川　一峰

どうして若者は都会に憧れるのか。都会なんて、そんなにいいとでもないのに。「分ってるさ。とにかく行きたいんだ。ダメだったら、また帰ってくるよ。だから父ちゃんも長生きしてくれよね。早よ死なれちゃ、おれ帰ってくるとこないもんな。きっとだよ。じゃ、バイバイ」。

村を捨てる子と親とのスキンシップが、この句に読み取れる。

一歩下る妻を物足らなく思い

中塚　喜甲

他人には見せぬ強気が妻にあり

飯塚　虎秋

どちらの夫婦も他人から見れば、恐らく何不足ない夫婦に見えるであろう。げに面白き哉夫婦、である。二句並べて鑑賞すると、実に微笑ましい。

もう腐る手前で蜜柑甘くなり

古野　伶人

魚が一番おいしいのは、腐るか腐らないかその微妙な段階のときだという話を聞いたことがある。魚の場合はともかく、蜜柑は、たしかにそうだ。まずい蜜柑が多くなったから余計にそう感ずるのか。人間も、とこの作者は考えるのである。

川柳の実用化

光武弦太朗

玄海の只中に浮ぶ光と風と波の島・壱岐島の南の端の島の町の一介の開業医である私は繁忙な医業のかたわら川柳を只一つの心の糧として、寸暇を惜しんで句を書き雑文をものしている。医業は生活の手段であり川柳こそ私の生甲斐である。しかし家庭を犠牲にしてまで川柳にうちこむ勇気はない。医業は暮しの手段にすぎぬとしても、私には家族や患者さんたちへの義務だけは忠実に果したい。もし、やむを得ぬ事情のため川柳と家業のどちらを選ぶかという土壇場に立たされるならば私は躊躇なく川柳を捨てるであろう。

椙元紋太師は「川柳は人間である」と云われ「川柳がいかに巧くなっても人間の向上が伴わなければ私は尊敬する気になれません」と仰言った。私は師の教えに一歩でも近づきたいと今日まで努力してきたつもりである。

麻生路郎師は「川柳は人間陶冶の詩であり己れの心の汚濁をしぼりだす詩である」と言われた。これは、己れにも人にも厳しかった師の本領を遺憾なく吐露された言葉であると私は思う。しかも師は堂々と川柳家としてのプロに徹して生きられた。「この一と筋につながる」信念は芭蕉にも劣らない気概である

しかし、私たち凡庸な半素人の川柳人にはとても及びもつかぬことである。右の手で家業に手を汚し、左の手で片手間に句を物する外に方法はない。そこで私は、わずか十七字の川柳に必死に費すエネルギーと、今まで学び取り鍛えあげた文章凝縮の技術を、自分の仕事の上に活用する道はないかと考えた。そして私は、これを従業員への仕事の上のアッピールや、一般の人びとへの医学啓蒙に応用してきた。たとえば、患者の応待についての訓示の代りに

「にっこりといらっしゃいませお客さま」
「言い訳けよりもハイッと実行！」
「清潔・迅速・丁寧・正確！」
「注射器もすぐに洗えば苦にならず」
「パリッと清潔！布巾と医療器！」
「自分のことより人さまのこと」
「奉仕しよう！病み伏す人の身になって」
「ご用心！タバコ・裸火・コンロの火」
「ポンプより水、水よりも火の始末」

あるいは患者さんに対しては

「病いは天が癒し報酬は医者が取る」
「高価薬より三度の食餌」
「亭主殺すに刃物は要らぬ。飲ませ肥らせヌカ六しやんせ」
「死にたくば大酒・大めし・肥りすぎ」
「ご用心！寒夜のトイレと熱い風呂」
「子供の買い食い万病の元」
「夫婦和合は健康の元」
「熱いキッスもホルモン交換」
「薬より医師、医師よりも看護人」
「頭使って気はもむな」
「すぐ医者へ！グッタリ・ヒキツケ・高い熱」
「仲の良い家に羽ばたく青い鳥」
「腕には職を！頭には智恵を！」

あるいは島民啓蒙の医学漫談（島の新聞に連載して好評）の末尾を川柳でピシリとしめくくる。たとえば「学童の保健」という文の末尾に、

「学童たちは春の若草のようにすくすくと育っています。悪い芽は早期に摘みとり、良い芽は一段と伸ばしてやりたいものです。

学童の多さ楽しさ若返る　紋太
箸置いてもう風の子は風の中　句沙弥
子供は風の子天の子父の子　三太郎
俺に似よ俺に似るな子を思い　路郎

というわけである。

日本医事新報にも度たび寄稿して川柳の啓蒙につとめている。しかも社は私の寄稿を歓迎してくれる。

医者が死を早めたことを誰が知ろ　路郎
医者替える大儀な用を言いつかり　句沙弥
ごぶさたの方がよろしい聴診器　春巣
ほかに医者は何を言ったか妻に聞く　ふ同人
死ぬ奴は死ぬさ俺の知ったことかい　麦一
そう聞けばそうとも見えるレントゲン　篤道
胃潰瘍ハハアあなたは恐妻家　弦太朗
治ったら親子でキャッチボールしよう　紋太

現代川柳軽視か無視か

吉田水車

昨年五月号で長野文庫氏の「現代川柳を軽視すな」という一文を見て、私の抱いている感想と同じようなご意見だと拝見したがちょっと角度をかえて考えてみたい。川柳の認められている例の二、三をあげると、

1、ふるさとへまわる六部は気の弱り
　　村松定孝著「泉鏡花」より
2、うまそうに何やら煮える雨宿り
　　金田一春彦著「日本語」より
3、抜きどこが悪いさかいと公卿いひ
　御主君はひとり無刀の御石碑
　石塔も大きな石が内蔵之助
　去年まで唯の寺なり泉岳寺
　その朝穴掘肩へ灸をすえ
　　松島栄一著「忠臣蔵」より

右は何れも古川柳からであって現代のものはない、文庫氏のお説の通り私も現代川柳軽視か無視かの感が深いが、それらの本のもつ意途に副うような句は現代のものでは適しないか乃至は著者の手もとに柳誌がないので古川柳によられたものと解釈がなされるのである。この場合現代川柳のPRが問題である、古川柳なら岩波文庫で「柳樽」が簡単に手に入るのに比し本屋さんでは今日殆ど柳誌を見ることが出来ないので何とか本屋さんで引請てもらうような手だてを各柳社も心がけられては如何なものであろうか。

註＝例句は各関係の本に発表の通りに従った、またその内の3は忠臣蔵を現代でどう詠んでも古句のようにはいかないが、皆無という訳ではない。

〝生々楽天〟記

近江砂人

―川柳番傘51年4月号から抜粋―

生々庵さんが、奥様の小石さんと共著で、〝生々楽天〟を出版された。

生々庵さんの喜寿、小石さんの古稀と併せて金婚に当たるというめでたい事が都合よく揃った本年を期して、記念出版されたものである。総量三百五十ページになろうという、量的なものに内容は、見返しに生々庵さんの富士に舞う鶴の絵と、小石さんの伊勢夫婦岩の絵が配され、巻頭には、一枚一枚見ていてもたのしいその折々の写真が数葉並べられている。そして、玉青先生主宰の青玲社出品作等、生々庵さんと小石さんの日本画が色刷りで六点も巻頭を飾っている。

さらに昭和三十年から毎年元旦のご夫妻の句画合作作品が、昭和五十一年まで二十二点完全に揃って発表されている。

中略―生々庵さんがすぐれた作家であることは今更私がここに記すまでもない。川柳家すべてが充分真価を知っておられるところである。

そしてこの本の末尾の方に小石さんの作品が何十句か並んでいる。

生々庵作品と研を競うすぐれた作品群である。―後略。

句集・生々楽天

中島生々庵・中島小石共著

福永清造

―川柳平安51年4月号から抜粋―

数年前の山頭火ブームのときに私の思ったことは、山頭火やあるいは放哉のような生活をしなければ、あのような佳句が得られないのなら、たとえ佳句を得られずとも一般的な社会生活を送りたい。と

著者中島生々庵氏はいまさら云うまでもなく川柳塔社の主幹、医博で小児科病院を経営される傍ら、ご夫婦揃って川柳はもちろん絵画に舞踊に小唄にと、広く深い趣味に永年いそしんで来られた。

中略―内容・装丁ともに極めて豪華なものである。読み進んでいくうちに、心の中にほのぼのとしたものを覚え、川柳の楽しさを教えてくれる絶好の一書である。―後略。

夫婦愛の句画集！

生々楽天

善意

小砂白汀選

被災地の善意に触れて食うにぎり　茶人
老人にゆずる善意に子がすわり　雀声
チャリテーの名付け善意に呼びかける　魚山
ゴミ拾う心隣りの前も掃く　祥月
捨てて来た犬を拾って届けられ　松花
突き放す善意を友に疑われ　紘
庭先に吊下げられた落し物　優
閉口たれぬ善意の傘を又補充　紫宏
本当の善意に失意の底で逢う　与史
万人の善意稔って建つ御堂　ろ亭
雨の日の故障の車に善意の手　としよ
席つめてあげるとでっかいヒップくる　度
善意での失敗だけど罪は罪　弘生
物好きのように見られている善意　弘朗
平常が大事善意として不問　伊津志
逆境にたって善意がいまわかり　代仕男
繕ってやった善意を逆に取り　軒太楼
人様は善意を出しやばり者にする　宵明
善意売る実名の色も濃と淡　藤持
名も告げず小走りに去る背を拝む　落猿

下心あるかと善意疑われ　伶人
新聞で見たと無名で着く為替　一郎
警察へ小さな善意呼び出され　福水
肘執らせ地下の乗り場へ白い杖　貞祐
ポイントを間違え善意悪に落ち　漫柳
友情の叱咤善意に受けとめる　昌道
お役所の善意で窓が低くなり　無人
五ツ子へ善意ばかりでない投書　不二
アルミ貨も含めて温い社会鍋　里風
ちっぽけな善意に触れて旅たのし　本蔭棒
ほのぼのと善意が薫る駅の花　どんたく
善意も受けず孤独にもなれず　道子
少々の悪も善意にとるゆとり　甫久路
横断路善意の小旗ちぎれてる　カズエ
間違いを厳しくさとすのも善意　悠泉
「善意型」「賽銭型」と金分かれ　可住
善意の手端見つからぬセロテープ　昭沖
凡友の善意はずばり飾らない　与根一

佳

ガムシャラに生きて善意をよせつけず　思月
善意の手嚙まれてからの人嫌い　香珠夫
採血車善意に馴れた顔でいる　芳子
医師哀し時に善意の嘘も言い　正則
ささやかな善意を素直に受けてくれ　としよ

人

つぶらな瞳小遣あつめてくる見舞　度

地

善意にばかり取って男を追いつめる　道夫
天

献血のまだ見ぬ人の血が流れ　白水

軸

名も知らぬ人からスズラン届けられ

鯉のぼり

羽原静歩選

五つ子の鯉のぼり日本中湧かせ　秋人
鯉のぼり黒いピーナッ知らぬ顔　としよ
背なの子をあやしてくれる鯉のぼり　正則
鯉のぼりのどかな茶摘み見おろして　登美也
ダムになる予定の村の鯉のぼり　一風
青竹の色が冴えてる鯉のぼり　甫久路
長女次女三女まだ出ぬ鯉のぼり　昌道
鯉のぼりナイロンになる世の移り　バット
麦刈りに皆出た留守を鯉のぼり　伶人
内孫と外孫おんなじ鯉のぼり　祥月
風止むと親子重なる鯉のぼり　道夫
鯉のぼりマイホームという泳ぎよう　与根一
庭付きの我が家がほしい鯉のぼり　思月
そのうちに尻に敷かれる鯉のぼり　本蔭棒

鯉のぼり女系家族の眼が白い　里風
曳船も鯉のぼり立てさかのぼる　与史
鯉のぼり古びたとこが旧家らし　一郎
原子炉が燃える街にも鯉のぼり　潮音
鯉のぼり子があきらめている暮し向き　昭治
自首をする気持にさせた鯉のぼり　翁童
鰯焼きの歌を聞いてる鯉のぼり　隆子
鯉のぼり峡の青嵐みんな呑み　露杖
子に買えず孫に贈った鯉のぼり　弘朗
鯉のぼり下でおしめがよく乾き　無人
鯉のぼり縁なきままに嫁がせる　豊生
そむかれる子かも知れない鯉のぼり　重人
ロッキード横目ににらむ鯉のぼり　芳仙
反り返る零歳の意志鯉のぼり　照沖
遠い日の詩を呼んでる鯉のぼり　好一
鯉のぼり夕餉の匂いへ降りてくる　芳子
鯉のぼり届け鉄柱立ててやる　綾女
金時がすがりついてる鯉のぼり　松花
音立てて矢車風の中にいる　七面山
鯉のぼり明治の空の夢を見る　のぼる

佳

風呂敷になって余生の鯉のぼり　逸名
鯉のぼりキリンのおまるの子をほめる　踏草
鯉のぼり数え疲れて陽が沈む　白水
パパとママ僕と揃うた鯉のぼり　国彦

人

新緑が張り裂けそうな鯉のぼり　宵明

地

戦盲の祖父へ見せたい鯉のぼり　福水

天

麻痺の児にせめてでっかい鯉のぼり　素身郎

母

不二田一三夫選

何という素晴らしき呼び名お母さん　甫久路
母となる大地に小石多すぎる　伊津志
叱言云う母に抜けない口訛り　のぼる
運動会啄木わかる母背負い　茶人
姉妹が寄ればやっぱり母のこと　代仕男
修身のあった頃の母まだ怖い　保夫
むし暑くなると母さんよくどなる　度
母の瞳はわが子のすべてを知り尽し　春日
飲み友達へは母顔見せず　不二
母さんに似てると欠点つつかれる　芳子
夜の蝶母と云う名に鍵をかけ　好一
誰よりも母を愛した父の手記　悠泉
母さんの晴れ着やっぱり割烹着　重人
名曲もおよばぬ母の子守唄　本蔭棒
母の夢から犯行を喋りだし　与根一
母の愛知らずまんまの死刑台　芳仙
母の背にでんでん太鼓はもう鳴らぬ　福水
筆まめな母は昔の仮名づかい　香珠夫
施設の児母の姿を星に見る　祥月
わが家に総理・大蔵母兼務　雀声
いつ帰って来てもぬーくい母の膝　七面山
一番の遅寝早起き母元気　国彦
眉とった母に似ている観世音　宵明
母の顔知らぬ子母の絵は書かず　右近
母が棲む心の隅がただ温くい　琲珈里
母の声聞くまで「只今」繰り返し　バット

佳

母の瞳に何かが揺ぐあれは愛　照沖
子沢山一人一人の母である　松花
母ひとり誰と語るや朝の燭　踏草
母に似た面影姉も老けてくる　魚山
お茶漬をこっそり食べて母やすむ　可住

人

家中をつなぎ合わせて母帰る　登美也

地

母方の資産がなにかと物を言い　軒太楼

天

熱の目を開ければいつも母が居る　一風

★森田茗人氏が米子医大に入院中なので代選しました。氏のご全快の早かれと祈ります。

（編集部・一三夫）

初歩教室

題 ―「内」―

本田恵二朗

川柳は心のストリップであり、心のマスタベーションであり、また心のフイクションでもあると言ってよい。但しその心は句主の本当の心でなくてはならない。その心が借りものであったり、ニセものであったとすればその句に迫力が無いばかりか、造花の媚びの域を出ないであろう。

内輪ごと並べて電話まだ続き　洛酔
（内輪ごと並べ合うてる長電話）
飴ひとつ小さな内緒事が済み　同
（飴玉で小さな内緒封じられ）
内風呂に浸して満足骨の髄　同
（内風呂の良さ見直した旅帰り）
腹の内見透かされそう茶の冷えたまま　同
（腹の内見透かされそう茶が冷える）
内鍵をかける必要のない田舎　鐘堂
（内鍵は忘れっぱなしで村平和）
内気な娘カーテン越しの自己主張　貞祐
内々で重態作りの抱え医者　同
境内の梅が人呼ぶ入苑料　同
（境内の梅が呼び込む入苑料）
気休めに内から固い鍵をかけ　落猿
（気休めが内からかける錆た鍵）
内ゲバを捨て大同つく賛成　同
（大同につこうと内ゲバまるめられ）
社内に芽生えた恋も育ち行き　藤持
（社内に芽生えた恋です育て合い）
ギャンブルに女房泣せの内の人　同
（内の人またギャンブルで泣かせます）
母さんの耳へ内緒がそっとくる　三十四
ロッキード日本の政治内輪もめ　同
（ピーナツへ政治家政治屋内輪もめ）
内輪もめやっぱり金が絡んでる　幸
内職の影が動いている夜更け　同
（内職の影ほそぼそと午前二時）
内幕はバレているのに見栄を張り　同
（見栄を張るから内幕を疑われ）
（見栄を張るから内幕がバレてくる）
（見栄を張るから内幕をバラされる）
内うちに済ましおこうと低い声　那智子
（内々に済ます話へ声落し）
内輪にと押えていると洩れている　同
（内輪に押え過ぎた逆効果）
（逆効果内輪に押え過ぎて洩れ）
内気なのが損して恋を逃してる　同
（内気さを逃した恋があざ笑う）
おずおずと案内を乞う門構え　度
（門構えボタン押す指戸惑わせ）
境界の内らでエゴを貯めている　同
（限界の内側でエゴをふくらませ）
検知器が示した腹の内の量　伊津志
（検知器に腹の内まで見透かされ）
内股に歩いて浮気など出来ず　同
（内股に歩く男で恋知らず）
よちよちの内緒話でくすぐられ　昭治
（よちよちの内緒話へ耳が笑む）
自民党内輪の話山とあり　同
（内輪もめひたかくしてる党の貌）
内々にしとけと上役からの指令　保夫
（内々にしとけと上から押しつける）
左遷ともとれる内示で呼び出され　同
（左遷ともとれる内示が腑に落ちず）
内職の肩を孫は銭にする　無人
神様でないから出来た内申書　同
内科からバリウム外科で手術され　同
（バリウムで内科と外科をつながれる）
勤続に妻の内助も一寸ほめ　茂美
（勤続賞内助があってこそのこと）
（半分は内助にやりたい勤続賞）
内縁の夫婦の城に彩がない　洋子
内気な子ママの手のひらで暴れてる　同
（ママの手のひらで暴れている内気）
内気な目がママを追ってる人園日　同
（入園式の内気な目がママを追い）
内々をどう嗅ぎつけるお節介　大成
（内緒ごと悪友ちやんと嗅ぎつける）
内訳を見る目へでんとサービス料　同
（内訳のサービス料が気に召さず）
叙勲の内祝へ思わぬ金が要り　江水
ここだけの話が帰りにふれ廻り　同
（帰り道絶対内緒が洩れこぼれ）

内弁慶七ツ道具よりチョコ　岳麓
（内弁慶チョコ一枚でまるめられ）
内金に安心し過ぎて詐欺にあい　同
内職の母の期待を裏切らず　同
漱石も古典の内に入そらし　文子
（漱石も今や古典に数えられ）
千日手その手の内にはまり込み　同
妻の内助時代と共にかわりゆく　日々子
（内助振り時代と共にかわりゆく）
内緒の買物セールス声高し　静子
（内緒買いへセールスの声高過ぎる）
腹立たし内幕知られ手が出せず　忠吾良
（内幕を知られて出せぬ手の置き場）
内緒ごと土手の穴から水が洩れ　正則
内気なる性を衝かれてたじろぎぬ　同
（内気さを衝かれ二三歩あとすざり）
核心を衝かれ内心ゆれかくし　柳五郎
（核心を衝かれて内心青ざめる）
詐欺師にも手の内読まる日の誤算　同
（手の内を読まれて詐欺師うろたえる）
（手の内を盗まれ詐欺師尻尾巻き）
内々に運んだはずを娘知り　漫柳
口許に内心の嫉妬を出す笑い　同
（内心は妬いてるらしい薄笑い）
平生をよそうて発表の通知待つ　天人
（平気そうな顔で合格通知待ち）
さて誰に似たかと見つめる子の内気　紘
（さて誰に似たかと思う子の内気）
割切ってみても内縁ふとさびし　同
内緒げに聞いて天秤にかけてみる　功
遺産分け身内同士の目が光る　同

内々で済ませたことが仇になり　冬扇
内々をくどくど云うてあやしまれ　同
三代に仕えて雛の色褪せる　瓢太
内閣どころか党の屋台骨ゆらぐ　同
内幕を知って養子の思うつぼ　利美
いざ金となると身内も知らん顔　同
内幕を子の正直がすっぱ抜き　同
内妻として新聞の種となり　弘生
内実を知りすぎて秘書解雇され　同
惚れている弱味内助に甘んじる　同
内幕は知らずよく食いよく笑い　健二
退院のうれしい悩み内祝　同
内気だと聞いてた見合でけなされる　同
内職の母にCM長すぎる　道夫
山彦が教えてくれた胸の内　同
きびしさを内へ吸い込む壺の肌　同
深入りをした親切が内輪もめ　慶彦

内の子に限りがとんだ恥さらし　同
開演のベルへ忙しい幕の内　同
家内中が受験生になっている　辰江
内輪を守るだけの妻でよし　同
（内輪だけ守る妻ですそれで佳し）
珍客へ娘らは内ゲバして喋り　静泉
見え透いた手の内女身構える　同
要するに内容ですよ浮き上り　頼次
（要は内容じゃよとツイたのがほざく）
内心は自慢がしたい愚痴もきき　露杖
（内心は自慢がしたいらしい愚痴）
調子づきふいと手の内見透かされ　同
（調子づいた隙に手の内ちらり見え）

題―惜―五月二十日締切（七月号発表）
宛先　岡山県倉敷市下津井一―九―三四
本田恵二朗

不二田一三夫著（「川柳寄席」校了　やっと墓が出来）

『川柳寄席』

価・二千円
送・著者負担

（本誌と同じサイズ・表紙カバーの句は久米奈良子氏筆）

序文・秋田実先生

内容／寄席の句／新聞や雑誌へ書いた寄席関係の雑文／夢路いとし・喜味こいし、海原お浜・小浜の漫才台本／若井はんじ・けんじ、上方柳次・柳太のディスク・ジョッキー／ほか／路郎賞候補作品／秀句鑑賞に出た句／本社句会で天位になった句／（川柳雑誌から川柳塔までの選句や句風の変遷がわかり、新人諸氏のご参考になれば幸甚―著者）

発行所
〒544　大阪市生野区
勝山南1―14―17
漫才作家くらぶ
（本社でもお取次いたします）

第二百九十八回（五十一年度第四回）

大萬川柳

「枝」入選発表

選者　川村好郎

投句総数　五百九十五句
入選　七十二句

あの枝へもうとどかない記念の樹　奈良　都詩
伸ばしたい枝は大事にされて枯れ　大阪　柳宏子
無理強いる針金を噛む枝の意地　堺　憲祐
枝葉までついて拡がるスキャンダル　大阪　好一
故郷の秋告げる土産は枝も付け　鳥取　茶人
防風林の枝風雪に耐えている　桜井　雀踊子
猫柳春待つ枝を刈り取られ　大阪　儀一
人間の身勝手盆栽ひねくれる　大阪　あいき
巨樹安泰サツは小枝を刎ねただけ　笠岡　古庵
本職が切ると枝から出るよい芽　大洲　暁明
奔放な枝たしなめる花鋏　大阪　文秋
短冊を吊る風情の枝をかり　泉北　春栄
咲き初めの枝霊前へ四季を告げ　和歌山　武雄
死ぬ日まで枝は悔いのない姿　八尾　弥生
花散らす風へ枝には枝の意地　藤井寺　美房
丹誠の小枝を孫にちょん切られ　大阪　道子
別居もう枝葉をつけて週刊誌　鳥取　日満
枝打ちをされて桧は天に伸び　倉吉　弘朗
愛情の剪定小枝に呵責せず　岡山　翁童
親会社の枝葉となって共倒れ　奈良　保夫
大吉を枝にあずけた歩が軽い　寝屋川　小路
木枯しの寂しさを聞く冬の枝　和歌山　道夫
大輪を願い明日へ枝を剪る　羽曳野　信子
街路樹の枝も手伝う屋台店　松江　与根一
枝くべてくべて朝待つバンガロー　平田　代仕男
背のびして嬉しい神籤結ぶ枝　神戸　要保
風雪に耐えた枝から出る若芽　鳥取　冬扇
お隣りの苦情へ惜しい枝を切り　尼崎　利美
お流儀へ鋏が迷う枝の向き　大阪　一栄
待ちかねた春一斉に青む枝　今治　昌道
枝先は小鳥のサロンに貸してやり　倉敷　健二
満開を支えきれない春の枝　神戸　どんたく
生花の見事さ無駄な枝がない　呉　英詩
ほめられた樹氷へ枝は耐えている　守口　笑風
一坪の庭にも小鳥の好きな枝　奈良　本蔭棒
枝ぶりへ凧ひっかけたままの春　倉敷　里風
枝下に余滴を貰う苔の花　倉敷　白水
延びすぎた枝お隣りでちょん切られ　宝塚　笑女
枝ぶりのよい下を借る花の宴　家元の鋏惜しいと思う枝も剪り　大阪　誓二
枝から枝と小鳥は春という姿　邪魔になる枝が一番蕾つけ　大阪　小松園
枝の枝調べる旧家の嫁さがし　枝葉だけ枯らしピーナツ地にもぐる　和歌山　富子
北山杉気ままにさせぬ枝払い　素人に剪るには惜しい枝ばかり　宝塚　静馬
古枝は華麗な過去を語らない　ご先祖の血が枝となり花となる　八尾　夕花
占いのゆらぐ心も結ぶ枝　来る年の実りへ枝を剪り惜しむ　富田林　維久子
枯れ枝で炊く飯盒も山の味　春を待つ枝は樹氷に耐えて生き　西宮　多久志
剪定というわけにもいかず子沢山　枝ばかり剪っても悪の根矯められず　西宮　百酒
雪解けを笹の小枝が待っている　うぐいすを画いてたしかに梅の枝　八尾　鬼遊
枝ぶりへ迷う心の花鋏　食卓の一枝春の息吹きする　富田林　花梢
みくじまた枝へ片恋いまだ続き　手間代も出ぬ豊作の枝たわむ

里帰り枝ごと持たす秋の味　堺　一二三

紙びなに桃一枝のひなまつり
枝ぶりへ師匠のはさみ軽い音
つき出した枝にも旧家という自信　東大阪　美子

佳句

無花果の枝越境を許される　和歌山　富子
花も実もつけて枝にもある誇り　大阪　道子
大海へ小枝くわえる鳥の知恵　島根　三和
冬天の枝に故郷の詩がある　八尾　美幸
枝先でぶらり蓑虫何思う　一二　百酒

人ノ句　鳥取　豊生

満月が一休みする松の枝　大阪　あいき
老いてよし孫よ曽孫と枝ひろげ　笠岡　古庵

天ノ句

大空へ枝は枝なり明日を見る　八尾　鬼遊

選者吟

北側の枝も負けずに出す新芽

昭和五十一年度ベストテン（三月現在）

一〇、〇　八尾　一　鬼遊

三	道夫	八、〇	和歌山
四	多久志	七、五	西宮
五	冨子	七、五	和歌山
六	花梢	七、〇	富田林
七	維久子	七、〇	富田林
八	静馬	七、〇	宝塚
九	美幸	六、五	八尾
一〇	小路	六、五	寝屋川
一一	一二三	六、五	堺
一二	美子	六、〇	東大阪
一三	幸	六、〇	和歌山
一四	道子	六、〇	大阪
一五	古庵	六、〇	笠岡
一六	吸江	六、〇	藤井寺
一七	筒子	六、〇	倉敷
一八	蘭	五、五	大阪
一九	好一	五、五	大阪
二〇	牧人	五、五	神戸
二一	利美	五、〇	尼崎
二二	与根一	五、〇	松江
二三	暁明	五、〇	大洲
二四	憲祐	五、〇	堺

以下略

昭和五十一年度第六回

「驚く」五句以内

締切　五月二十五日

第七回「指」五句以内

締切　六月二十五日

投句先

〒593　堺市堀上緑町一―三―七
藤井一二三方

大萬川柳係

時事吟

福浦勝晴

「倒産続出」
お手上げもエスカレートで億三ケタ
倒産を食い物にする整理屋か
「卒業と不況」
大学は出たけど朝からパチンコ屋
パチンコ屋あの長髪も失業者
「おののく高官」
悪名を政史に残すロッキード

「プロ野球始まる」
不況カゼどこ吹く風のオープン戦
「爆破魔横行」
イタズラかほんまか爆弾気をもませ
網棚に残った包み気味わるし
「大相撲好況」
協会もノコッタ連日大盛況
「日雇労務者」
またストかお次はシトシト、シーズンか

川柳塔社常任理事会（4月2日）

「川柳塔の歌」の審査を早くするようにとの要望である。栞氏は健康上の理由で選考委員長を辞退され、結果正本水客、橘高薫風、小浜牧人、不二田一三夫が審査し、入選候補作四篇をさらに常任理事一同で入選歌を決定することになった。（生々庵主幹提案）

「生々楽天」発刊祝賀パーティのプログラムを栞氏から説明があって、それを全員で当日の役員などを決めた。

同人清水一保氏らの東伯川柳大会の本社からの選者は若本多久志副理事長快諾。

多久志氏の会計報告があり、同人費、誌代の滞納者にはやむを得ぬ送本中止を重ねて強調された。

出席―多久志・静馬・いわを・柳志・薫風・柳宏子・栞・好郎・生々庵・小松園・一三夫（敬称略）

柳界展望

（原稿締切毎月末）

▼川柳塔史に51年4月11日は記念すべき佳き日となった。生々庵・小石ご夫妻の金婚・喜寿・古希の三重奏「生々楽天」刊行記念パーティが心斎橋・大成閣5Fではなばなしく開催。（特集のページ参照）正に豪華絵巻というにふさわしい三時間だった。

▼これよりさき、3月28日には生々庵主幹の学友や親戚の方々による前記慶事の祝賀宴がやはり大成閣で開かれた。令息の三医博が主催されたのだが、4月11日同様、実に和ごやかな心あたたまる集いであった。主幹ご夫妻は世の幸福を全部にさられた感があった。およろこび申しあげます。

▼桜井六葉句碑除幕式並びに記念川柳大会が4月11日に石川県鶴来町社会教育センターで開催。本社参事伊藤茶仏氏は宿題「こころ」の選者として出席された。

▼第22回島根県観桜川柳大会が4月11日に木次町町民体育館二階和室で開催。兼題「旅」は黒川紫香氏。「潟」は尼縁之助氏が選者として出席。柳話は黒川紫香氏。

▼後藤蝶五郎・山田よし丸両氏の句碑建立の基金募集一口千円から、締切七月末日。送金先、黒石市大字横町二〇、句碑建立事務局・中村瞭象宛。

▼冨士野鞍馬氏（東京都）から—四月三日は久良伎の32回忌ですが十八日に市川で久良伎忌を営みます。これだけは出席せねばなりませんので足腰衰えて歩行困難ですが頑張って参ります。—氏は大学院の男女10名ほどに吉原の講義をしたり（ご自宅で）古川柳研究会へは毎月出席たりしてご健康である。志水剣人氏（くろしほ主幹）が久良伎、剣花坊の新川柳を始めた時の模様を聞きに訪問され、大阪の小島六厘坊のことなども話された由、これらはテープにおさめられたそうである。

▼川柳大阪は四百号の歩み（出品目録）を発刊。大正十年の「川柳以交会」から「川柳大阪」に至るまでを年別に編集したもので「市電川柳」というなつかしい誌名も出てくる。

▼備北新聞3月15日付に川柳塔が（三月号）紹介されている。「北海氏の提案・中島生々庵」「アンバランス・川村好郎」「抜け道がない筈がない知らぬだけ・大坂形水」外「アローハ・ハワイ・橘高薫風」「水煙抄・順調に心臓動き年あらた・吉田落猿」外「垂井葵水遺句集・戸田古方」「ペンペン草・不二田一三夫」その他。

▼諷詩人（41号・石原青竜力主宰）青竜力氏採録—公害裁判勝っても指は曲らない、越智一水。はぐれ鹿もしや革マル派かも知れず、村上春巳。東京都世田谷区瀬田二—十九—九、石原方諷詩人同盟（頒価三百円、送料共）

▼川柳入門—課題吟の実際句の提出の仕方や選の仕方など。発行所—むつ市昭和町4の8、下北川柳社（百五十円、〒不要）

▼堀口欣一氏（郷土雑誌・若狭人発行所主幹）は「若狭」抜刷で〝西田当百のこと〟を発刊。当百小伝といったもので、同県人の先輩としての記録が目をひく。

▼矢治香径著、川柳小説「和美という女」山田良行、麻生路郎氏句評。川柳六〇〇句、柳論、随筆など。価一五〇〇円—送金先・〒923小松市安宅町五五九—五、矢治香径。

▼金子呑風氏（上田市）から—四月十八日は私の句碑洗いで、また皆さんが寄って花見兼句会が芝生の上で催されます。八十一歳ですがまだ歩ける足を伸ばしたいと思います。

▼市川鱗魚氏（岐阜市）から—老人講座も四十回を越しました。資料がないので路郎先生の川柳講座や川柳鑑賞で進めております。

▼中山凡路氏（川柳天守閣副会長）は3月27日逝去。同社の四月句会は凡路氏を偲ぶ会とされた。

新同人紹介

樫谷漫柳（かしたにまんりゅう）

—一三夫・庸佑—推薦

▽同人の動向△

▼若本多久志氏（副理事長）は5月3日の第11回山陰川柳大会の選者として出席される。場所は東伯町中央公民館で、兼題は「伸び」「新しい」「子連れ」「つき合い」席題は四題当日発表（各三句）東伯川柳会発足20周年記念大会—会長は清水一保氏（鳥取県）

▼尼縁之助氏（出雲市）から—会社勤めを退きましたが、退職に妻の看護や孫の守り—で、会社をやめたらやりたいことがいっぱいあるのに、一向に進みません。

▼河村日満氏（鳥取市）から—森田茗人氏は目下米子医大に入院中で、二月十八日には茗人氏の母堂が亡くなられたとのお知らせを受けた。また若本多久志氏の「左利き」の毎日新聞を見て「左党」かと思ったら「

ぎっちょ」のこと、イヤ爽やかな記事でしたと。

▼三宅不朽氏（竹原市）は四月三日退院、当分は家庭養生をされる由。およろこび申しあげます。

▼上方芸能誌の特集「ロッキード事件」へ不二田一三夫氏の推薦で川柳塔の同人二十数氏が執筆された。

▼児島与呂志氏（藤井寺市）から—川柳大阪四百号記念句会は盛会でした。そして記念句集も出版、皆様のおかげですと。

▼黒川紫香氏（尾崎市）の愛孫、宝塚少女歌劇の美保かほりさんがある電鉄会社の宣伝ポスターになり前途が楽しい。氏は水客氏のかわりに島根の観桜句会に出席された。

▽旅　信△

▼梅谿庵不酔氏（姫路市）ライオンズクラブの親善旅行で九州へ。有田焼、有明海のムツゴロー、唐津の活魚料理、嬉野温泉の綺麗どころ—鹿児島で札幌ラーメンたべさされ—不酔。

▼菊沢小松園氏（大阪市）娘夫婦や子供たちと有馬へ来ています。—久方の有馬に華麗な陽が沈む—小松園

▼尼緑之助氏（出雲市）から—若狭湾三方五湖に来ています。四月十一日は生々楽天のパーティと木次の観桜大会とカチ合ってしまい迷っていますと。

▼岡崎詳月氏（松江市）奥谷弘朗氏のお世話で一行六名が三朝温泉へ来ています学校支部長退職、最後の旅行をしました。

▽句　会△

▼**菜の花句会**—5月10日（月）午後6時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪八尾下車南へ歩約1分。兼題—鯉・男・裏表・歩く。投句先—大路美幸宛。

▼**堺川柳会**—5月12日（水）午後6時から八木摩天郎居

兼題—後悔・気楽・見送る

▼**南海川柳会**—5月20日—兼題—予算・弱音・苦手。

▼**南大阪川柳会**—5月20日午後6時から—兼題—無情・パンチ・好意・冴える。松崎町三丁目、大萬。

▼**川柳東大阪**—5月22日（第4土曜）午後6時から—会場・東大阪市中央公民館第二集会室（近鉄永和駅すぐ南）市民会館二階—兼題—豆腐・鰹・芋・いちご。席題二題。

▼東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は五月二十三日。

富柳会、菜の花合同盆梅句会

三月十四日（日）
三重県鈴鹿市神戸町　魚半楼
出席者—弥生、形水、琴、雀踊子、忠明、茂雄、夕花、花梢、牧人、不二也、要保、川狂子、美幸、酔々、鬼遊、多久志、柳志、〆女、弘生、幸生、薫風、美代、維久子、和美長野、岳人、さよ子。

（天地人・軸の順）

兼題　「梅」　西尾　琴　選

梅一個友と分け合う日の軍歌　美幸
梅鉢の紋を誇って元士族　多久志
梅便り受験地獄の眉けわし　鬼遊
骨格美あらわに盆梅咲きほとり　琴

兼題　「都」　若本多久志選

あこがれた都で飢えた心抱く　雀踊子
都会の隅に人間が捨ててある　花梢
逃げて来たことも自由のない都　雀踊子
古都慕情加茂の流れに散るネオン　多久志

兼題　「支える」　香川　酔々選

一錠が命支えるヤジロベー　幸生
目に見えぬものを支える釈迦の指　薫風
雪をつく瞽女は祈りに支えられ　美幸
支えてる梯子に父は夢賭ける　酔々

★

梅もまた利殖の他でない地元　弘生
綾とりの記憶たしかに梅も老い　美代
梅の鉢ハラハラさせる孫が来る　忠明
ポケットの殺意が梅に見とれてる　弥生
梅ひそと咲く落人の里らしく　牧人
盆梅の明日は咲く気の陽を集め　柳志
睦まじい限り梅見の老夫婦　〆女
梅干の予約を母に里の庭　要保
裾模様梅一輪が咲いたまま　岳人
紅梅のひらかぬうちに嫁にゆく　夕花
連れて来て母に見せたい梅一輪　和美
梅の咲く別荘物静かな主人　不二也
鍵っ児の涙で暮れる都会の灯　優
ふりむけば都の水壁崩れそう　幸生
国訛りとれても都は辛いとこ　茂雄
その支え消えぬ日記が濡れている　維久子
支えるワイヤー関門橋にある力　季賛

本社四月句会

会場　金属会館
七日　午後六時

陽春四月、新緑五月は句会の敵とされていたが、最近は花より句会という熱心な方がふえ、句会部は大よろこび。

和歌山勢は太茂津・千寿子さんらの熱意がそのまま句会に生かされ、本社句会を盛り上げてくださる。毎月のことながら遠路のところありがとうございます。

今月の柳話は、兼題の「満開」「身綺麗」「強情」「放談」の四つの言葉を使って三題ばなしふうに戸田古方氏が新味を出された。

親鸞や釈迦が登場する氏独自の柳話で、しばし会場は善男善女のつどいとなる。（この柳話は後日本誌で発表）十一日にせまった「生々楽天」刊行記念パーティの役割りなどがそれぞれ休憩の時間に通達される。

若柳潮花氏が久しぶりに名調子で「手枕」の披講をされた。「川雑」時代は句会の幹事として柴香氏などと活躍されたものである。

三月句会はやや暑く、汗が出たものだが、四月句会はすこし寒く、スチュームが会場を暖めるなどヘンな季候がつづいている。にもかかわらず毎月盛会である。

今月の月間賞杯は大路美幸氏。八尾勢いよいよ強し。

（進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊）

出席—与呂志・雅風（正彰改め）多久志・重人・滋雀・敏・蘭・古方・太茂津・千寿子・与史・武雄・水客・潮花・柴香・薫風・形水・いわを・一三夫・柳宏子・幸太郎・千万子・夕花・柳志・つき子・鶴声・勝晴・漫柳・肖二・綾女・恭太・誓二・静馬・古啓・恒明・三十四・凡九郎・幸生・道夫・酔升・一舟・吸江・文秋・牧人・あいき・君子・岳人・度・鬼遊・酔々・喜美子・生々庵・瓢太・弥生・維久子・一二三・鎮彦・川狂子・栞・葛城・庸佑・雀踊子・〆女・美幸・儀一・頂留子・小松園・葉子。

席題「崖」　高木幸太郎選

どうしても夫婦になれば崖っぷち　重人
断崖にいどむザイルに血が通う　〆女
分譲地うしろの崖が崩れそう　牧人
崖っ淵ここまで来てもまだ迷う　凡九郎
引かえす道だけはあり崖の下　千万子
親孝行するかと崖をのぞかされ　恒明
崖に立つ女きれいな歯を見せる　鎮彦
崖の下弱気な言葉落ちている　道夫
届かない崖に綺麗な花があり　柳宏子
もう下れない断崖に立つ五十　美幸
迷いみちいつしか崖に来てしまい　夕花
断崖に立って男は勝負する　与史
一本のロープに命かけた崖　潮花
断崖でガイドもやっと息を入れ　吸江
誰がいつ掘ったか崖の仏さま　与呂志
断崖の男が抱いている言葉　道夫
望郷の崖にハポマイまだかすみ　滋雀
ロッククライミングザイルに生命結び合い　柳宏子
断崖絶壁ふっと死んだろかと思い　一三夫
山男だけが知ってる崖の百合　与呂志
断崖に佇る望郷の海を見る　牧人
城一つ欲しくなる日で崖にいる　幸生
崖くずれ役所のスキを衝いてくる　静馬
崖ちょに女が立てばあやしまれ　千万子

席題「手枕」　若柳　潮花選

父の手枕恍惚の序曲かも　千万子
ひらめいて手枕急に起き上り　肖二
手枕で恋の筋書考える　一三夫
台所の音を手枕そっと聞き　柴香
手枕にカゼ引きまっせ起きなはれ　重人
手枕の片耳愚痴を聞き流し　滋雀
手枕で明日吹く風は考えず　弥生
手枕の夢はしびれた頃に覚め　多久志
手枕で手形の割れる日を数え　庸佑
怪しからん企て手枕思いつく　形水
ねずみちょろちょろ手枕が起き上り　文秋
手枕のめがねゆがんで見るテレビ　恭太
手枕で拗ねたまんまで寝てしまい　柳宏子
手枕を妻の毛布に起こされる　千万子
乳離れをした児に手枕癖になり　儀一
銀婚のいまも手枕して貰ろて　恒明
不甲斐ない男と手枕知っている　千万子
手枕で小さく母のひるねぐせ　千万子
手枕の足チャンネルを回してる　形水

ぎっちょ」のこと、イヤ爽やかな記事でしたと。

▼三宅不朽氏（竹原市）は四月三日退院、当分は家庭養生をされる由。およろこび申しあげます。

▼上方芸能誌の特集「ロッキード事件」へ不二田一三夫氏の推薦で川柳塔の同人二十数氏が執筆された。

▼児島与呂志氏（藤井寺市）から—川柳大阪四百号記念句会は盛会でした。そして記念句集も出版、皆様のおかげですと。

▼黒川紫香氏（尼崎市）の愛孫、宝塚少女歌劇の美保かほりさんがある電鉄会社の宣伝ポスターになり前途が楽しい。氏は水客氏のかわりに島根の観桜句会に出席された。

▽新住居△

▼大谷月都氏（西宮市）は西宮市樋ノ口町二丁目七八の一〇、〒六六三へ転居された。（電〇七九八—六四—七七一三番）

▼佐々木静泉氏は神戸市からまた元の鳥取市で教壇に立たれる。〒680鳥取市卯垣二四七の一。

▽旅　信△

▼梅谿庵不酔氏（姫路市）ライオンズクラブの親善旅行で九州へ。有田焼、有明海のムツゴロー、唐津の活魚料理、嬉野温泉の綺麗どころ—鹿児島で札幌ラーメンたべさされ—不酔。

▼菊沢小松園氏（大阪市）娘夫婦や子供たちと有馬へ来ています。—久方の有馬に華麗な陽が沈む—小松園

▼尼緑之助氏（出雲市）から—若狭湾三方五湖に来ています。四月十一日は生々楽天のパーティと木次の観桜大会とカチ合ってしまい迷っていますと。

▼岡崎詳月氏（松江市）奥谷弘朗氏のお世話で一行六名が三朝温泉へ来ています学校支部長退職、最後の旅行をしました。

▽句　会△

▼**菜の花句会**—5月10日（月）午後6時から西郷会館（八尾神社境内）近鉄大阪八尾下車南へ歩約1分。兼題—鯉・男・裏表・歩く。投句先—大路美幸宛。

▼**堺川柳会**—5月12日（水）午後6時から八木摩天郎居兼題—後悔・気楽・見送る

▼**南海川柳会**—5月20日—兼題—予算・弱音・苦手。

▼**南大阪川柳会**—5月20日午後6時から—兼題—無情・パンチ・好意・冴える。松崎町三丁目、大萬。

▼**川柳東大阪**—5月22日（第4土曜）午後6時から—会場・東大阪市中央公民館第二集会室（近鉄永和駅すぐ南）市民会館二階—兼題—豆腐・鰹・芋・いちご。席題二題。

▼東洋樹川柳賞贈呈川柳大会は五月二十三日。

富柳会、菜の花合同盆梅句会

三月十四日（日）
三重県鈴鹿市神戸町　魚半楼
出席者＝弥生、形水、栞、雀踊子、忠明、茂雄、夕花、花梢、牧人、不二也、要保、川狂子、美幸、酔々、鬼遊、多久志、柳志、〆女、弘生、幸生、薫風、美代、維久子、和美長野、岳人、さよ子。

（天地人・軸の順）

兼題　「梅」　西尾　栞　選

梅一個友と分け合う日の軍歌　美幸
梅鉢の紋を誇って元士族　多久志
梅便り受験地獄の眉けわし　鬼遊
骨格美あらわに盆梅咲きほこり　栞

兼題　「都」　若本多久志選

あこがれた都で飢えた心抱く　雀踊子
都会の隅に人間が捨ててある　花梢
逃げて来たことも自由のない都　雀踊子
古都寡情加茂の流れに散るネオン　多久志

兼題　「支える」　香川　酔々選

一錠が命支えるヤジロベー　幸生
目に見えぬものを支える釈迦の指　薫風
雪をつく臀女は祈りに支えられ　美幸
支えてる梯子に父は夢賭ける　酔々

★

梅もまた利殖の他でない地元　弘生
綾とりの記憶たしかに梅も老い　美代
梅の鉢ハラハラさせる孫が来る　忠明
ポケットの殺意が梅に見とれてる　弥生
梅ひそと咲く落人の里らしく　牧人
盆梅の明日は咲く気の陽を集め　柳志
睦まじい限り梅見の老夫婦　〆女
梅干の予約を母に里の庭　要保
裾模様梅一輪が咲いたまま　岳人
紅梅のひらかぬうちに嫁にゆく　夕花
連れて来て母に見せたい梅一輪　和美
梅の咲く別荘物静かな主人　不二也
鍵っ児の涙で暮れる都会の灯　優
ふりむけば都の氷壁崩れそう　幸生
国訛りとれても都は辛いとこ　茂雄
その支え消えぬ日記が濡れている　維久子
支えるワイヤー関門橋にある力　季賛

本社四月句会

会場　金属会館
七日　午後六時

陽春四月、新緑五月は句会の敵とされていたが、最近は花より句会という熱心な方がふえ、句会部は大よろこび。

和歌山勢は太茂津・千寿子さんらの熱意がそのまま句会に生かされ、本社句会を盛り上げてくださる。毎月のことながら遠路のところありがとうございます。

今月の柳話は、兼題の「満開」「身綺麗」「強情」「放談」の四つの言葉を使って三題ばなしふうに戸田古方氏が新味を出された。

親鸞や釈迦が登場する氏独自の柳話で、しばし会場は善男善女のつどいとなる。（この柳話は後日本誌で発表）十一日にせまった「生々楽天」刊行記念パーティの役割りなどがそれぞれ休憩の時間に通達される。

若柳潮花氏が久しぶりに名調子で「手枕」の披講をされた。「川雑」時代は句会の幹事として柴香氏などと活躍されたものである。

三月句会はやや暑く、汗が出たものだが、四月句会はすこし寒く、スチュームが会場を暖めるなどヘンな季候がつづいている。にもかかわらず毎月盛会である。

今月の月間賞杯は大路美幸氏。八尾勢いよいよ強し。

（進行・西田柳宏子—記録・高杉鬼遊）

出席—与呂志・雅風（正彰改め）多久志・重人・滋雀・敏・蘭・古方・太茂津・千寿子・与史・武雄・水客・潮花・柴香・薫風・形水・いわを・一三夫・柳宏子・幸太郎・千万子・夕花・柳志・つき子・鶴声・勝晴・漫柳・肖二・綾女・恭太・誓二・静馬・古啓・恒明・三十四・凡九郎・幸生・道夫・酔升・一舟・吸江・文秋・牧人・あいき・君子・岳人・度・鬼遊・酔々・喜美子・生々庵・瓢太・弥生・維久子・一二三・鎮彦・川狂子・栞・葛城・庸佑・雀踊子・〆女・美幸・儀一・頂留子・小松園・葉子。

席題「崖」　高木幸太郎選

どうしても夫婦になれば崖っぷち　重人
断崖にいどむザイルに血が通う　〆女
分譲地うしろの崖が崩れそう　牧人
崖つ淵どこまで来てもまだ迷う　凡九郎
引かえす道だけはあり崖の下　千万子
親孝行するかと崖をのぞかされ　恒明
崖に立つ女きれいな歯を見せる　鎮彦
崖の下弱気な言葉落ちている　道夫
届かない崖に綺麗な花があり　柳宏子
もう下れない断崖に立つ五十　美幸
迷いみちいつしか崖に来てしまい　夕花
断崖に立って男は勝負する　与史
一本のロープに命かけた崖　潮花
断崖でガイドもやっと息を入れ　吸江
誰がいつ掘ったか崖の仏さま　与呂志
断崖の男が抱いている言葉　道夫
望郷の崖にハボマイまだかすみ　滋雀
ロッククライミングザイルに生命結び合い　柳宏子
断崖絶壁ふっと死んだろかと思い　一三夫
山男だけが知ってる崖の百合　与呂志
断崖に佇る望郷の海を見る　牧人
城一つ欲しくなる日で崖にいる　幸生
崖くずれ役所のスキを衝いてくる　静馬
崖ちょに女が立てばあやしまれ　千万子

席題「手枕」　若柳潮花選

父の手枕恍惚の序曲かも　千万子
ひらめいて手枕急に起き上り　肖二
手枕で恋の筋書考える　一三夫
台所の音を手枕そっと聞き　柴香
手枕にカゼ引きまっせ起きなはれ　重人
手枕の片耳愚痴を聞き流し　滋雀
手枕で明日吹く風は考えず　弥生
手枕の夢はしびれた頃に覚め　多久志
手枕で手形の割れる日を数え　庸佑
怪しからん企て手枕思いつく　形水
ねずみちょろちょろ手枕が起き上り　文秋
手枕のめがねゆがんで見るテレビ　恭太
手枕で拗ねたまんまで寝てしまい　柳宏子
手枕を妻の毛布に起こされる　千万子
乳離れをした児に手枕癖になり　儀一
銀婚のいまも手枕して貰ろて　恒明
不甲斐ない男と手枕知っている　千万子
手枕で小さく母のひるねぐせ　千万子
手枕の足チャンネルを回してる　形水

手枕をして休日をぼけてみる　つき子
手枕へ幼い夢をあたためる　雀踊子
手枕で少しすねてる意志表示　多久志
手枕のしびれに耐えて夫婦仲　鶴声
もうこんな時間か手枕酔がさめ　蘭
手枕をはずせばこの子起きるやろ　古方
ふすま開く音へ手枕目を閉じる　形水
手枕で普請値切った壁を悔い　一二三
望郷の念手枕で噛みしめる　水客
手枕で話しが続く旅楽し　鎮彦
手枕は雨の飯場の国なまり　肖二
手枕の狸寝いりへ春の風　潮花

兼題「満開」　西田柳宏子選

満開を追うて養蜂旅つづく　芳子
春斗の旗満開の花散らす　正朗
満開の幸運もなく夫婦老い　日満
満開の花欠伸する郷里の駅　優
満開の茶店一年分稼ぎ　雪美
満開の下で苦むす墓眠り　幸
満開へ不況忘れの踊りの輪　一栄
満開の下は狂った人ばかり　亜鈍
満開の日まで巡拝延ばしとき　千寿子
満開の下のむしろはさわぐとこ　喜美子
満開を駅のポスターにだまされる　潮花
満開へ暫し二人の手が離れ　雅風
満開のさくらに入学迎えられ　牧人
満開へ鯛焼くんも泳ぎ出る　いわを
満開で花は恥じらい捨てました　幸生
満開を待たずに切られるチューリップ　小松園
満開へ雇われ仲居の白い足袋　雀踊子
満開の一ひら散らす鐘の音　喜美子
満開の下で明日の職が無し　恭太
満開の写真で旅へおいでませ　一二三
満開の花へ話をそらされる　寿美子
満開へ道徳心がすててある　雀踊子
満開になれば塩昆布炊いた亡母　岳人
満開の古木疲れたとこがない　鎮彦
満開のままで造花は色あせる　好一
満開の今宵女になる化粧　滋雀
満開へ蜂の巣箱が移動する　潮花
満開の花今日満ち足りている生命　凡九郎
満開を待たず一ひら散りいそぐ　生々庵
満開の日の満開の石だたみ　幸太郎
満開の下で理屈が消えてゆく　水客
出稼ぎの父へ満開の便り書く　維久子
雑草もひっそり満開迎えてる　千寿子
満開を塀の外から賞められる　柴香
満開へ猫と小鳥と父が留守　鬼遊
満開の花に個性のない不満　水客
満開へ天下を取ったように酔い　吸江
満開の花は淋しく散るばかり　柳宏子

兼題「強情」　本多柳志選

強情へ知られたくない過去があり　亜鈍
強情を通してくれる職に生き　柳信
強情をまげず通した孤独感　軒太楼
強情にこの手しかない多数決　日満
強情に負けて過保護を持て余し　清女
強情を亥年生れの性にされ　一栄
強情なくせにワイロはそっと受け　多久志
強情を土性骨と間違われ　栞
敵ながらその強情が頼もしく　一三夫
強情な背を向け合って寒く寝る　形水
肩にまで伸ばした髪をまだ刈らず　与吏
意地っ張り同士乗り越ししてしまい　柳宏子
強情に泣かされました通夜の愚痴　滋雀
骨拾う強情の眼に光るもの　弥生
強情も結局妻に引きずられ　柴香
頑に理想求めて嫁きおくれ　静馬
強情の不貞寝へカレー匂うて来　静馬
強情な心孤独に輪をかける　文秋
強情なところがあると通信簿　庸佑
傷口をなめて負けたなど思うてず　水客
押しただけ退かれて強情負けを知る　幸生
自分でも強情と気付く歳となり　生々庵
強情の背を孤独が通り抜け　一二三
強情な男へスッポンかみつかず　度
皿洗う音に強情まだ残る　女
強情の首は縦には動けない　漫柳
強情な男勲章辞退する　酔々
強情に合わす歯車母の腕　喜風
灰皿に男の強情捨ててある　岳人
強情な腰が砕けた付焼刃　儀一
デスマスクまで強情な父でした　綾女
強情な女と見えぬ片えくぼ　失名
強情も通り過ぎると茶目に見え　川狂子
強情な男とさざえは知っている　度
四面楚歌となって自説をまだ曲げず　牧人
土曜日の妻の強情憎うなる　美幸
強情な父後妻には弱かった　綾女
強情で通るか枕何時もぬれ　一舟
死期を知りつつ強情を張りつづけ　柴香

強情な母でブームの外に居る　千寿子
強情を張ってお灸に耐えている　葛城
強情な女美事に死んで見せ〆〆女　女
強情が波紋の中に居る孤独〆女　方
ああ強情それでも地球動いてる　古方
強情に草は水など欲しがらぬ　岳人
強情を張って曲れば行き止り　寿美子
頑として許さぬ父も孫を抱き　柳志

兼題「身綺麗」　傍島　静馬選

身綺麗であれかし一票あげた人　日満
身綺麗な人へ持ってく名誉職　一栄
身綺麗になって故郷の駅に立ち　軒太楼
身綺麗な人に哀しい過去があり　登美也
平凡は平凡なりの身綺麗さ　亜鈍
身綺麗になって更生する門出　正朗
身綺麗に生きて淋しき寡婦がいる　与吏
身綺麗になる前歴がつきまとい　滋雀
身綺麗の仮面迷わす黒い霧　喜風
身綺麗で心豊かな貧に生き　太茂津
身綺麗な二号にひょいと虫が付き　儀一
身綺麗になった男に無い小指　雀踊子
身綺麗な友ですこし肩さがり　幸生
身綺麗な女は過去を口にせず　つき子
身綺麗な老婆お迎え待つばかり　形水
身綺麗に女一人で強く生き　牧人
身綺麗にしてよ私が笑われる　恒明
身ぎれいを借金取りもほめて行き　千万子
身綺麗な妻に浮気を封じられ　文秋
身綺麗な証しをみせる丸坊主　滋雀
身綺麗にして清貧に甘んじる　多久志
身綺麗の蝶いまわしい過去があり　武雄
身綺麗に勧めうだつも上らない　寿美子
身綺麗で去る定年を惜しまれる　牧人
身綺麗に生きて平社員で終り　与史
身綺麗に住んで女の下駄ひとつ　水客
土に生き土に身綺麗訓えられ　太茂津
身綺麗の蘆を覗いている鏡　美幸
身綺麗になって聖書を汚さない　岳人
身綺麗が過去知る友をけむたがり　静馬

兼題「放談」　大坂　形水選

放談は猪口を重ねるほどに出る　正朗
放談の気に障ったか一人立ち　芳子
放談を料理している記者のメモ　優
時事放談結局政治愚弄する　登美也
放談で覗いた本心つつかれる　弘生
放談の尻をワイフにつつかれる　どんたく
放談にうなずき別の事思い　清女
放談の底流にある満足感　軒太楼
手術にはふれず放談してかえり　亜鈍
放談へ秘書はヤキモキ目を伏せる　吸江
放談が揚げ足とらせぬ線をひき　生々庵
放談の起承転結は心得る　小松園
放談の裏で手形の日に追われ　夕花
ホラ吹きがひとり横どりする放談　つき子
放談で笑わせ茶菓子みんな食べ　柴香
放談を老妓笑うて聞いている　薫風
胸張って放談総理をクンで呼び　一二三
放談の内に政治を匂わせる　川狂子
北浜をふるえあがらす車中談　多久志
百歳の放談知事もかしこまり　一舟
放談居士NHKにチェックされ　一三夫
お茶替えに来て放談に巻きこまれ　柴香
放談へ野党食いついて離れない　三十四
放談の中からニュースかぎ分ける　柳志
放談も自己宣伝は忘れてず　幸太郎
マスコミの網に放談引っかかり　幸太郎
放談になり宴会も引け間近か　潮花
放談のここは記事にはできぬとこ　庸佑
ニュアンスの違いと放談突っぱねり　恒明
ちと過ぎたかなと放談むきを変え　生々庵
自己主張のない放談の積木つむ　水客
国会を総木偶にして呵呵大笑　古啓
商売と思うて放談じっと聞く　静馬
名士の放談生い立ちに少し触れ　多久志
軽るがると地球を片手にもつ放談　岳人
善人の放談夢を追いつづけ　美幸
大臣の放談録音されていた　形水

（河井庸佑・整理）

川柳塔社運営資金として
金一封
村田瓢太氏
生々楽天刊行記念パーティ
徽章
小川恒明氏
川柳塔社
ご厚情ありがとうございました

▼かならず原稿用紙にペン書きで文字は楷書。締切毎月末着便まで。21行以内。十七字以内の句に、下三マスに雅号。

川柳大阪　児島与呂志報

精力の減退六十路と共に越し　洛醉
巨星地に墜ちたる如し恩師の訃　醉升
初詣値下げ祈願もして帰り　武松
送別会泣かぬ誓いを裏切られ　京介
特売と云う商魂へ女走らされ　六竜子
三ヵ日だけでもでっかい夢を持ち　呑歩利
早春の土は力んで待っている　敏
早春に恋のボートが揺れ動き　笑風
ムードには酔えぬ男で恋を振り　雅巣
好き勝手言える平和をもて余し　本蔭棒
銀婚の旅がハワイの虹を追い　重人
決意ない新年飲んで寝てるだけ　喜醉
特売のチラシ残業で書く企画　一の字
冷暖房完備でお先に風邪を召し　秀峰
精力をつけて鉄骨の足確か　道子
ピーナッツをうっかり食べた食あたり　胡蝶
公害許さじと追求のペンきびし　誓二
基地の上ピーナッ凄い音で飛び　漁人
孫の目に小さい嘘が見えるかも　与呂志

川柳たましま　稲田豊作報

渡れない橋を渡った伝言板　里風
宿命の糸切る鋏は売ってない　三辛堂
神棚の高さへご無理申し上げ　千翁
盃で廻っているのが主役です　林鶴
宿命に負けて家紋の中で老い　鼓草
親を忘れたわけではないという伝言　豊作
脇役へ体当りしている主役　よしを
神棚に塵が積っていて平和　筒子
賛成をして二次会で出る不服　慶子
母になり母の躾が効いてくる　誠一
平凡な会話に幸せの顔がある　秀子
父の机に白紙ばかりが積んである　八笑人
娘がいない人も見とれる高島田　扇水
ワイロの世界白黒テレビに教えられ　安静
嘘つきの指太陽を振り向かず　澄子
福祉論マヒの俺にはめぐまれず　耕水
梅一輪竹薮の中白を呼ぶ　民恵
十年の金利物価に笑われる　朝二
母と子のゲンマン明日へもう寝てる　静海

川柳ささやま　河原みのる報

お令ですからねと医者一言が遠回し　越山
一票へあの手この手の遠回し　近江
一生をニコニコしててよう蓄めず　みのる
幼な児の笑顔悲しい通夜の席　とんぼ
例えばを沢山ならべ遠回し　初音
三つばかり若く見られた日の和み　宗珠
同窓会五十才ほど若返り　可住
遺影には済みませんがと若さもち　緑村
若返る心の隅にある芽生え　千代子
ねばられて勝手にせいと男負け　与志
ネジ巻いて後妻の紅へ若くいる　百合子
母無能ねばり強さだけ教え　れい子
石橋をたたいてねばる夜ルの冷え　つや子
悩み事秘める笑顔が美しい　喜美代

川柳後楽（岡山市）　井上柳五郎報

番頭のもみ手相槌二枚舌　勝恒洋
相槌を打つ隙がないまましゃべり　胡風
相槌に煽てられてるお人好し　九坡
善人の相槌を打つ癖があり　秋月
相槌を打ったが許すとは云わず　元一
鍵っ子が黄昏淋しくママを待つ　めぐみ
鍵っ子の夕焼雲と対話する　博友
前身は言うまい過去を秘めた鍵　定恵
追われ猫恨めしそうに振り返り　柳五郎
鬼を追う豆の音から春の声　たけ志
真実を追えば出世の邪魔になり　夏彦
少年の心にかえって夢を追い　久米雄
面影を追う灯明の灯が明し　熙
スリの味忘れさせない指を持ち　廉
迷惑をかけてあと味悪いスト　照路
味付けを病気の妻になめさせる　哲郎
旅帰り我が家の味を噛みしめる　

オー・エス・ケー川柳会　大坂形水報

一本のザイルにたくす山男　みどり
禁煙を誓い最後の火をつける　一扇
カメラだけが本当の年を写してる　栄
一本のヒットに喘ぐ打者不振　一念
一本の道をゆきます新入社　秀川
こんどこそ水にも負けぬ火の恋だ　哲行
良い事があって一本よけにつき　常夢
この花が届いた頃に電話しよう　野生
目に見えぬ火花散らす名人戦　岳麓

花嫁のブーケ持つ手が振るえてる　貞彦
花札のコタツに対う老夫婦　亜也子
停年へ一本道を歩いてき　有一
胃カメラでこころの中はうつせまい　聖地
チビッ子にカメラ向けるとかしこまり　千夢
一本の熱燗今日を忘れさせ　博泉
焦点が合うと被写体動き出す　亜成
いたずらなカメラがもとの離婚沙汰　形水
カメラぶれこの時酔うていたらしい　入仙
ため息へ妻は一本つけてくれ　好郎

西宮北口川柳会　小浜　牧人報

皿洗いの苦労もあった立志伝　千世子
予定日へふくらむ嫁の妊婦服　笑女
あり合せ盛って豊かに見せる皿　絹江
春近し活ける手許の華やかさ　総甫
ヤァヤァと言われた人の名を忘れ　清川
落葉たく煙にむせる昼の月　いづみ
賽銭の額より大きい願いごと　青壺
薄命を悼む一すじの煙立つ　牧人
海は黒板白い鷗が文字を描く　伊升
明日を描く絵皿に私の彩を溶く　婦美子
夜のとばり人を捨てたい時がある　半歩
青い空マスクが道に落ちていた　正祐
逆境を生き抜いて来た母静か　〆女
梅の花切り絵のような少女来る　めぐる

川柳塔まつえ　岡崎祥月報

巣立つ子に社会の信号教え込む　みのる
穴道湖は何時でも絵になる姿持ち　愚童
螢の火恩師にすまぬ距離ができ　巡歩
絵のような夕陽が映える参観日　英子
巣立つ娘の和服子供ともう見えず　早苗
巣立つ子の萠ゆる柳に面映ゆく　澄水
絵の趣味があって目につく床の軸　雪美
巣鴨の同獄生の岸児玉　鶴丸
出来るなら巣立つ子故郷に残したし　孤呂二
ロッキード一億啞然たり日毎　逓児
絵の様にぼけて宍道湖冬の色　叮紅
浮世絵の価値を見直す逆輸入　晃男
ロッキード狐狸のだまし合い　祥月

京都塔の会　松川　杜的報

宿の傘雪また降ってまた止んで　求芽
還暦へさあこれからの地図さがす　明代
ホステスに次第に遠くなる故郷　王石
垣根から犬に人相見てとられ　紫香
妥協するつもりの酒が無駄にされ　潮花
裏話阿呆になるよりしかたなし　季賛
十二神将寒の暗さにいきり立ち　笛珠
釘一本妻の指図で打つ平和　耕三
平手打ち女は女取りもどし　三光
住民に同情するが杭は打ち　飛鳥
出る杭になって打たれてから悟る　誠史
豆好きと云ったとたんにからかわれ　永楽
テキストの通り黒豆炊けあがり　客遊子
煮豆まだ亡母の味付までいかず　白渓子
平手打ち女の意地が消えてゆく　水客
魚板打って待つ間を古寺の落椿　杜的

南大阪川柳会　金井　文秋報

配慮する立場になった廻り椅子　柳宏子
新聞と一つしよに並ぶ虫眼鏡　鎮彦
公平に名前は覚えんことにする　古方
嫁の荷へ天の配慮に晴れた朝　滋雀
気のひがみ人の配慮を逆に取り　好一

佳句地10選（前月号から）

川竹松風選

嫁ぐ夜の父の無口が突き刺さる　美幸
昼酒の相手している敗北者　弥生
病身というハンディに助けられ　酉合
いい事が続き人間気がゆるみ　菁居
赤い爪聞けば意外な親思い　ふく代
おふくろの味が煮豆の中に生き　飛鳥
除夜の鐘笑いの中で倖を知る　〆女
限りある命だと知る枯葉散る　早苗
焦らない女で針の穴見える　度
峰に舞う雪は国境など知らず　岳人
御配慮に感謝しますは口の先　思月
小さな義理も埋めて妻の十二月　一栄
例外にする前例をたしかめる　柳志
例外の色で咲くから騒がれる　小松園
例外を設けて労資妥決する　形水
十二月山の男が風邪をひく　岳人
プロレスが終り男湯混んでくる　文秋
混雑を別な私の貌で押し　好郎
人混みの死角を走るスリの指　雀踊子
人混みに白髪目あてに後を追う　綾女
ライバルに負けてはならぬプレゼント肖　二
プレゼント自分の好きなものを選り　あいき
何んでんのと妻に聞かれたプレゼント凡九郎
マスコットほっぽり出して嫁にゆき　一舟
クシャミしてやっと別れた立ち話　柳信

川柳たけはら　森井　菁居報

還暦の夢鬼共が笑うとも　静水

吹く風に愚痴はこぼさず寒椿　房子
腕組んで歩く坂なら楽しかり　笑子
笑顔を固くして男を意識する　文晴
うとうととさせて床屋の釣自慢　花宴
生涯を雪のてるてる坊主かな　不朽
弟のおふくろ代りという気負い　寛子
淋しさの中に鎖がひとつある　蘭幸
書く人の心にのった墨の色　政巳
節約を決めた矢先へ要るお金　そのみ
とうさんに見られたくない日記帳　愛
逆ろうてみる愛されている自信　菁居
花束を捨てて貧者の灯となりぬ　紫光
台所トントン妻の音がする　のばら
アイデアで画く二人の設計図　美佐雄
どうしても頼ってしまう友があり　千代美

倖せは成人の娘に着せる柄　貞子
何か夢持てそうストーブの灯が赤い　一路
いっそ馬鹿になれば心も安まろに　英詩
石一つ一つに詩がある旅路　かつ子
頼られている倖せを逃がすまい　酉合

ハワイ川柳ウイロー社　林　蒼蛇楼報

希望もつくらしは老いを近づけず　カロ女
望まれて坐った椅子が高すぎる　峰円
寝たきりの妻に望みが断ちきれず　拝山
絶望の淵から奮起今日の地位　秀山
大望を持てよといつもさとす父　小雪
人望が有徳の彼を押し上げる　蒼蛇楼
凧あげて希望を高い空に見る　一つ葉
生き甲斐は望みの慾がある間　紅渓
叱るだけ叱って許す娘の望み　三石

雅号ぶっちゃけばなし（148）

よしお　くや

久家代仕男

昭和二十三年島根食糧事務所に奉職。翌年機関小誌の毅友（当時は検友）に山根梟人選の柳壇が設けられ、先輩の奨めで投句したのが川柳入門の動機です。雅号が無くてはということで頭をひねって見たものの分別の浮かばぬまま、国民全体の奉仕者であるという職業意識を本名に結びつけ、世仕男で投句したのですが、編集の間違いで代仕男となって載り、以来今日に至っております。易学的には前半は順風満帆。後半は尻すぼみとの御宣託にもれず、ぱっと致しませんが、これとて雅号の精ではなく、努力が足りぬに外ならずと肝に銘じ、地味ながら終生を雅号に挑戦の臍を固めて居る次第です。

農産物検査官（五十六歳）

涙でも拭けと望みを許す父　雪女
過去は過去希望を未来の春に待ち　彩珉
海外雄飛希望に燃えた移民の子　稠雄
自惚れもまじえ好運望むなり　草海
双方の望みかなえて不和を解き　公女
望まねどシニア市民となった年齢　伯雲
渡布前に抱いた大望泡と消え　快夢起
薄化粧今日一日へ望みかけ　万里歩
半世紀希望の蕾見えはじめ　暁舟
老骨は望み捨てずに趣味に生き　河舟
望みほど才たけもせず世をなげき　北海

どんぐり川柳会　谷垣　史好報

老梅は力の限り気品もつ　いわを
徹夜するペンに重さのないごとく　薫風
おそ咲きの梅がたしかな花をつけ　恵美子
梅が咲きおむつの干場かえられる　万里
寒紅梅こんな女はないかいな　吸江
餌運ぶ燕に負けまい朝を出る　好郎
梅干にぬきさしならぬ嫁の意地　真砂
信仰の山へ無欲の足運ぶ　喜風
惚れた弱身どちらも人形になりたがり　小松園
床の間に梅匂わせて政治論　酔々
運ぶだけ運ばせ二号飽きたらず　儀一
三寒四温梅花は咲こうか咲くまいか　瓢太
熱い茶を徹夜へ母も必死なり　一二三
相惚れへ易者が嫌な事を言う　鬼遊
徹夜の夫パンの匂いを持ち帰る　サヨ
老いらくの恋を語らう梅の花　重夫
相惚れと知りつつ一寸すねてみる　敏雄
開店の徹夜口笛咲いて明け　美幸
梅が散り桜が咲いて酒の味　岳人

早咲きの梅はやっぱり早く散る　鎮彦

川柳東大阪　竹中肖二報

限界の壁へ男を賭けてみる　好一
三億へ賭けた威信が丸つぶれ　良京
不労利得やさかいに賭けてみとうなり　古方
実行のできぬテーマが多過ぎて　綾女
海洋博テーマの割りに人行かず　誓二
お産にも似て卒論に組むテーマ　正彰
熱弁が次第にテーマから外れ　柳宏子
クリーン三木テーマ通りには行かず　三十四
行きすぎる位いのファイトある若さ　鎮彦
境界線へギリギリの家が建ち　季賛
ぎりぎりの線で漁獲をして揉める　肖二
ぎりぎりまで寝ている男のトースター雀踊子
ギリギリまで喫って値上り埋める腹　一栄
小さい賭けパチンコたこができただけ　喜風
怪しげな呪文でねむくなる振り子　湖風
母さんの振り子が止まるお正月　度
行きすぎの善意を妻に疑われ　儀一
どたん場に立てば器用なうそがつけ　美子
女房の振り子になっている平和　柳信

川柳わかやま　太茂津報

なつかしい仲よし童話の中に居る　和子
仲よしの友に明日は叛かれる　那智子
仲よしがとうとう最後まで無言　凡九郎
足跡をたどれば夫婦の詩がある　寿子
吊橋を渡る全身足になり　幸
落書きに悲しい心が捨ててある　としよ
落書きに○秘の人事洩れている　福水
学習熱仲よしこよし歌わない　善彦
仲よしの借りは心に書いて済み　与史

一分間の柳論

松下梁水

「川柳は人間陶冶の詩である」。この言葉に惚れてこの道に入り、社内報、労働組合報宗教誌、等に幾度となくこの言葉を拝借して記事を書かせて頂いたものである。

それは、私自身もこの道に入るまで、川柳とは、社会を茶化し、揶揄しながら面白可笑しく詠むものと思っていた。だから友人にこの道に入るよう勧められても体よく断わり続けていた。しかし、ある日その友人からこの言葉を聞き、また先輩各位の玉句に触れることにより、私の誤解に気が付いたのである。

以来、私のような誤解をしている人達に一人でも多くその誤解を解いて頂きたい一心から、機会がある度にこの言葉を拝借している。

ところが昨今、難解句と言えば不勉強とお叱りを蒙むるかも知れないがいくら考えても理解できない句に接することがある。「人間詩川柳」と言う以上、「川柳を知らない人達にも納得して頂ける川柳。」と願うのは私一人だけであろうか。

判押せばきびしい貌をする紙片　武雄
山彦がきびしくて男うろたえる　道夫
足洗う世間の水は冷めたくて　喜誉司
二人三脚まだまだ先のある二人　英子
背の子と春の足音待ってます　千寿子
聞かぬ耳もってそつなく世を渡り　佐智子
耳打ちをすればあたりの目が揃い　元一
孫の書く顔にこの頃耳がつき　まさ枝
耳のない地蔵で知らん振りをする　大輪
きびしさに馴れて背中が曲ってず　弘生
仲よしの距離は昔のままである　雀踊子

駒つなぎ川柳会（大阪市）岸南柳報

腕前はよくても食べぬフグのキモ　南柳
墨の色まだ腕前をみとめない　鎮彦
腕前は料理の本を頼らない　肖二
テーブルから鶯が啼く梅見茶屋　多津緒

盆梅の見事さ庭の雪忘れ　綾女
手の出ない値で手のひらに乗る古梅　小路
寒くとも春には咲けよ梅の花　誓二
さよならと云うのが惜しい受話器おく　潔
すれ違い余韻残して行く蛇の目　柳信
晩鐘の余韻にこんもり寺浮び　正彰
快楽の余韻は胸に永く秘め　祇風
余韻ある声に魅せられゴールイン　茂子
教会の余韻の中のハネムーン　儀一
団体がドヤドヤ余韻ぶちこわし　恒明
捨てゼリフ吐いた余韻に負けてくる　美代
ふりむかぬ心に余韻ただよわせ　つとむ
受話器おく声の余韻がからみつき　はやを
大和路は鐘の余韻にあけくれる　宏子
釣鐘の余韻先祖に逢う気持　悟郎
山彦という名にかわる鐘ひびく　小松園

南海電鉄川柳部（大阪市）　辻　圭水報

お寺でも接待します南無阿弥陀　摩天郎
接待と云う名で金の使うこと　圭　水
陽気さもあって接待派手になり　宏　子
接待へ宵から女おちつかず　維久子
接待を受けてやっぱり買わされる　柳　信
淡々とした接待の味気なさ　清　女
接待のあの手この手に軍資金　儀　一
接待がなかなか出来ぬくらし向き　季　賛
接待に出た娘嫁にと白羽たて　昌　女

和歌山七面句会　中筋　三幸報

父の日も父は運転席に居る　幸
宴席が日本を左右するもある　光　治
助手席に昨日とちがう女が乗り　晶　子
唇をかんで鍵ッ子意地をみせ　寿　子
唇が合うとき地球停ってる　太茂津

瓜赤く唇赤く服赤く　凡　夫
唇づけが花火の空を遠くする　其　夕
親の夢背負い園児の第一歩　富　子
夢よもう一度人間ドック入り　武　雄
夢のよな話しと笑いのってこず　知　也
寂光院女の席は胸痛し　和　美
唇を読んでハンディ背追う道　たか子
悪夢とは思いたくない傷を持ち　ふく代
席順に一苦労した今日の宴　三　幸

三井が丘川柳会　高田　博泉報

片言でコマーシャルソングから覚え　亜也子
タイムスイッチかけまちがえて食えぬめし　亜句童
子のおもい電気のように響く我　琴　音
電動のおもちゃばかりを欲しがって　博　泉
歌声が自意識しないままで出る　凡九郎
宴会にシャシャリ出てる音痴だけ　てまり

雅号ぶっちゃけばなし（149）

じゅうろう

おおや

大矢十郎

父母は十人の子を産み育てて来た。その十人目に生まれたのが私である。十人目だから十郎、いとも簡単なようだが、それなりに命名に苦労したらしい。十は最大の数であり又最小の数でもあり、四方に伸びゆく可能性が含まれている。然し、上へは頭打ちにして望まれず、下へ細く伸びてゆく運命の字画である。郎は男を表わすものである。官吏であった謙虚な父に、小学生の頃聞かされていた。名は体を表わすというが親を恨む術もなく五十二年を過してきた。兄二人が不慮の死を遂げたが現在四男四女八人が元気で、私達兄弟の年令を合計すると五百才になります。ちょっとした私の秘密です。

木材スーパー社員（五十二歳）

十年前の口説き文句をお忘れか　加代子
スタンドでながしの歌に涙出る　草生
船の旅電気カミソリ手から手に　三郎
毒舌に口を開かせまいとする　亜成
若者にわからぬ恋の枯れすすき　鬼遊
満ち足りた心花にも歌があり　〆女
電光で暗いニュースをはなやかに　公子
手術台真一文字に口をしめ　度
祖母ひとり電気がこわいお留守番　三千子
父として重たい口がちょっと賞め　柳宏子
夜の底で黒く霊歌が這いまわり　亜鈍
真実を告げる重たい口ひらく　牧人
ヒューズ直せばパッと電気がつきました　古方
反論があるので口を見つめてる　薫風

虹川柳倶楽部（唐津市）　新岡回天子報

清貧に生きて動ぜぬ母の像　五木
一の字になれと吹く風鯉のぼり　照沖
新しい暦弥生の風が繰り　実
大物が逃げる切り札診断書　広坊
嘘、真、善意の解る苦労人　朴竜
誘致した工場の音へ云う苦情　岩光
逝く春を追かけいそがし養蜂家　一竿
鯉のぼり竹青くして初節句　弘子
物価高精一杯の幟揚げ　春吉
雨降れば降ると文句を人はいう　金志郎
二太郎と三姫生んだ鯉のぼり　三日造
金権の政治がコダマ生みおとし　久隆
裏に裏あつて国会携らず　勝一
中高大一度に金がかかりすぎ　紫浪
ベルが鳴る今日のホームの長いこと　虹汀
法律を無視重罪のやから世は平和　回天子

本社五月句会

日時　五月七日（金）午後六時
会場　金属会館
南区鰻谷東之町10番地
電話　271・3935番

柳話　菊沢小松園
（今月の出題・児島与呂志）

兼題
「柳」　高杉鬼遊選
「一と言」　野村太茂津選
「針」　八木摩天郎選
「焦れる」　若本多久志選

席題　二題　当日発表
各題三句以内厳守

会費　三百円

★投句だけの方は切手百円封入

★電話での投句や訂正はご遠慮願います
大阪市南区鰻谷中之町20
川柳塔社

6月の兼題「抜ける」「世界」「向う」「船」

6月句会は7日（月）
7月句会は7日（水）
8月句会は6日（金）
9月句会は7日（火）

お願い！

同人費や購読費は早目にご送金ください。
ご送金がないと送本を中止いたします。
ご協力のほどお願い申しあげます。

川柳塔社運営部

・募集・

七月号発表（5月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「折り紙」両川洋々選
「中元」清水一保選
「ほおずき」工藤甲吉選

★原稿は四百字詰原稿用紙に四枚以内。文字は楷書で新かなづかいにしてください。

八月号発表（6月15日締切）

川柳塔（10句）若本多久志選
水煙抄（10句）川村好郎選
愛染帖（3句）正本水客選
課題吟（各題5句以内）
「寝不足」出原敬一選
「金婚」落合思月選
「高官」新岡回天子選

★川柳塔欄の投句は本社同人に限ります。
★用紙はなるべく柳箋をご使用ください。

一人の遅稿　大ぜい困る

定価　三百五十円（送料29円）
半年分　二千二百五十円（送料共）
一年分　四千二百円（送料共）
昭和五十一年四月二十五日印刷
昭和五十一年五月一日発行
編集兼発行人　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　中島蓬太郎
印刷所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　藤原童心社
郵便番号　542
発行所　大阪市南区鰻谷中之町二〇番地　川柳塔社
電話大阪・二七一―三九八五番
振替口座大阪・三三三六八番

・ペンペン草・

新緑

★畳三枚ほどのわが家の庭だが、それでも植木棚は緑一色である。娘たちがすてた柿の種が二階を越すほどの木になって、若葉を枝にいっぱいくっつけている。秋になると食える柿がとれるのだが、陽が庭へあまりあたらないので裏の他人様の家へ伸びていく。そうなると枯れ葉が全部よそ様の家へ落ちるのでこまる。それはさておき、この柿の木に若葉が躍動してくると、今年もガンばらなくちゃ、とファイトのようなものがわいてくる。

若さ

★若さというものが年々消えていって、今では、どのグループでも年がさの人間になってしまっている。わびしいことである。いま、若い人に負けないものは、というと、また食べる話になるが、食うことだけである。鰻丼でも天丼でも二杯なら軽い。バカみたいな話だ。しかし食う以外はだんだんダメになっていくようである。やっぱり若い人には勝てないなあ。月一回、若手の上方漫才の研究会へいくのだが、台本を書くのに気おくれがするのだ。なさけないことだが、「古いなあ」と云われやしないかと思って……。本年のNHK（近畿）の演芸台本研究会の新メンバーに、高校二年生の、お嬢さんが加入した。いよいよ自信喪失である。そこへいくと川柳のほうは気楽である。若手が五十歳というのだから。ただ送本の日は、今までのように両腕に本を抱えて走れないので、ちょっと弱気にはなるが、まだ二、三年は、働けるだろうか。ぼくにも新緑時代があったのだが。

二代目の時代

★半年ほど前まで、朝日テレビの洋画解説者で菅見有弘という人がいた。この人を見た瞬間、ぼくはドえらい錯覚をしたのである。あのロイドめがねと、あの顔は、ぼくの知っている人なのだ。だがよく考えると、その人は四十何年か前の人で、しかも十数年前に病死したことを新聞で読んでいるのである。―菅見恒夫といって、映画記者時代に会ったときは、たしか明大の学生だった。死んだのは東宝映画の宣伝部長時代である。そこでABC制作部へ問い合わせたところ、やはり有弘氏は恒夫氏の令息だった。瓜二つの顔だった。

★もう一つ。ぼくとこへは川柳だけでなく、いろんな方面から電話がはいる。その日も先方サンは「お父さん、おいでしょうか」と云う。「ぼくが不二田一三夫ですが」と返事をすると先方サンの父というのが、若い頃ぼくに三行コントの指導を受けていたので、もっと年寄りの声だと思っていたのに。ということだった。もう二代目まで生きてきたことになる。しかし今さら若葉では飾れないが気持ちだけは若くありたい。

（不二田一三夫）

▼葉子コーナー

▼通勤に毎日、昭和三年完成という吊り橋を渡ります。近くに玉手山遊園地がありますので低学年の遠足地のメッカらしいです。

▼だいぶ傷んだ吊り橋ですが子供には人気があります。5月頃の吊り橋は特に私に夢を与えてくれます。

アリナミンA
お役だていただくために タケダ
肉体疲労時・妊娠授乳期・病中病後のビタミンB₁補給、神経痛・筋肉痛・腰痛・肩こりの緩和。
☆1日1～4錠を1～3回に分けて服用してください。☆説明書をよく読んで正しくお使いください。☆25ミリ錠のほかに5ミリ錠
武田薬品工業株式会社 〒541 大阪市東区道修町[illegible]

川柳塔社同人のシンボル・マーク
女性作家のもあります
一個千百円（送料共）

●川柳塔社同人句集●
『川柳塔』
頒価 1500円　送料 200円

創刊 大正十三年 通巻 五八八号
昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
昭和五十一年四月二十五日 印刷
昭和五十一年五月一日 発行（毎月一日発行）
川柳塔 五月号
定価 三百五十円（送料二十九円）

南紀 和歌山 四国でのお泊りは

南海電鉄サービスチェーン

《ホテル・旅館》

白浜温泉——忘れえぬ はまゆうの宿
政府登録国際観光ホテル ホテルパシフィック
政府登録国際観光旅館 朝日

勝浦温泉——海に浮かぶパラダイス
政府登録国際観光旅館 中の島

湯峰温泉——山のいで湯で山菜料理
政府登録国際観光旅館 湯の峯荘

和歌山・新和歌浦——海岸美が楽しめる
政府登録国際観光旅館 萬波

徳島・鳴門——うずしおの宿
政府登録国際観光旅館 鳴門
政府登録国際観光旅館 鳴門公園ホテル

紀北・橋本——ゴルフの宿で季節料理
観光旅館 紀の川苑

大阪・泉南淡輪——魚つりにゴルフに
観光旅館 淡の輪苑

大阪・なんば——清楚で近代的なホテル
ホテル南海

お問合せ・お申込み ■ 南海国際旅行・日本交通公社
サービスチェーン大阪案内所
☎06-631-0222

あたたかいご家庭へ、あたたかいおみやげ！

豚饅
焼売
焼餃子
豚まんの王様、やき豚入り
叉焼饅

大阪・なんば
蓬莱
TEL(641)0551～2

<出張店> なんば高島屋／虹のまち鹿鳴／心斎橋そごう／梅田阪神／天満橋松坂屋
京阪デパート／堂島地下センター／中之島サン・ストアー／なんば新川店／奈良近鉄百貨店